

# Since 1971

西南学院大学

# 国際交流50周年記念誌

Seinan Gakuin University

## International exchange 50th anniversary

今年から米三

次、卒業生との関係をも  
一度考てみましよう。私学は  
業生のバック・アップ、協力が  
ければ希望しないとはいま  
もありません。わたしは、卒  
業生には、大小を問わず出  
てくるべき考え方を定立し  
て、協力を要請して

母校への愛情は在学中に養  
たものでなければ卒業後に花開  
くものではありません。その意味  
において、わたくしは開けっぴ  
ろトを在学中に生諸に傾けら  
たいのです。その第一歩は教

支障  
から感  
で、時  
らて、卒業生が  
留のホーム・カミング  
けることを希望すべ  
いかに努めます。

母校への愛情は在学中に養  
たものでなければ卒業後に花開  
くものではありません。その意味  
において、わたくしは開けっぴ  
ろトを在学中に生諸に傾けら  
たいのです。その第一歩は教

協力量  
生との

50th

今年から米三

次、卒業生との関係をも  
一度考てみましよう。私学は  
業生のバック・アップ、協力が  
ければ希望しないとはいま  
もありません。わたしは、卒  
業生には、大小を問わず出  
てくるべき考え方を定立し  
て、協力を要請して

母校への愛情は在学中に養  
たものでなければ卒業後に花開  
くものではありません。その意味  
において、わたくしは開けっぴ  
ろトを在学中に生諸に傾けら  
たいのです。その第一歩は教

支障  
から感  
で、時  
らて、卒業生が  
留のホーム・カミング  
けることを希望すべ  
いかに努めます。

母校への愛情は在学中に養  
たものでなければ卒業後に花開  
くものではありません。その意味  
において、わたくしは開けっぴ  
ろトを在学中に生諸に傾けら  
たいのです。その第一歩は教

協力量  
生との

# 今年から米国と留学生

は教官も

前院長の遺志継ぐ

生との連帯

協力関係を深める

国際交流の

早期実現をはかる

ユニバーシティなどの交換を模  
が一部実現をみています。先日、  
します。

も徒勞に終るといふことを、  
諸君も自覺されたのであつた。



年はこれで終りなのか、そう  
たふさぎ、突然として三島由

の朝服事件がおこった。三島

作家とつむぎつらぬく人々

ことをやる。――「同利を害す」を破るということでは意味を

賞候補にまでなった作家とし

なかつたかという意見が圧倒

ある。▼右翼にせよ、左翼に自分の考えを主張する際に、

や武力を行使するのは、自分

「熱いお茶を」

人のもつ島国根性のあらわれ

孔子は「中庸は徳の至れるも

り」と当時の人々に教えていた。二は、夜台祭の論理とし





## 発刊によせて

学長 G.W.バークレー

*G.W. Barkley*

本学は、全国に先駆けて1971年に国際交流事業を開始し、2021年に国際交流開始50周年を迎えました。この記念すべき節目を、皆様と迎えることができましたことに心より感謝申し上げますと共に、この50周年という節目を記念して、『西南学院大学国際交流開始50周年記念誌』を発刊いたしました。

本学の国際交流は、1971年にアメリカのニューヨーク州立大学オネオンタ校へ初めて派遣留学生を送り出したことや、バイラー大学との姉妹校協定を締結したことから始まりました。当初、協定校はアメリカを中心に数校しかありませんでしたが、現在では33ヵ国102校の協定校を持つまでに拡大いたしました。今日に至るまでに、1,500人以上の本学学生が中長期の交換留学制度である海外派遣留学生制度を利用して海外へと羽ばたいており、留学を経験した数多くの卒業生が国内外で活躍しております。また、これまでに世界中から約1,600人の交換留学生を本学にて受け入れており、西南学院での経験を活かして世界で活躍できる人になっていることを願っています。

近年、交通手段の発達や国際的な市場の開放等によって、海外に留学することは昔ほど珍しいことではなくなりました。また、日常的に世界中の情報にアクセスし、簡単に世界中の人々と交流を持つことができるようになりました。しかし、自らの意志で自国を飛び出し、海外の文化や習慣を学び、多様な価値観に触れるという経験は、必ずや生涯の糧になるものと私は確信しています。国際交流を先駆けた大学として、今後もより多くの派遣留学生に異文化体験の機会が与えられるように、制度の発展に努めたいと考えております。

本学の国際交流の発展は、協定校や関係者の方々など、多くの皆様からの多大なる御支援や御協力があったからこそと、この場をお借りして心から深く感謝を申し上げます。

このたびの50周年を契機とし、次の50年に向けて、時代の変化に的確に対応した国際交流事業を精一杯展開していきます。また、在校生や同窓生、地域社会は当然ながら、世界中からも愛される大学になるよう、教職員一丸となって努力して参ります。将来のグローバル社会を担っていく学生に最高の経験を提供できるよう、今後とも一層の御支援と御協力を賜りますようお願いを申し上げます。

## Upon Publication of the “Commemoration of 50 Years of International Exchange”

Gary W. Barkley, President

Seinan Gakuin University was one of the first universities in Japan to institute an international exchange program for faculty and students in 1971. This year we celebrate 50 years of exchanging faculty and students with universities from around the world. As a token of our appreciation of the cooperation we have had with foreign universities and in commemoration of the 50th anniversary, we are pleased to publish the “Commemoration of 50 Years of International Exchange.”

Our first exchange student went to State University of New York, Oneonta (then SUCO = State University College at Oneonta) in 1971, and in the same year, we entered into a mutual exchange program with Baylor University. At first, our exchange programs were with universities in the United States. Since then our program has expanded to 33 countries and 102 universities on six continents. Up to the present, more than 1,500 Seinan Gakuin University students have studied abroad as exchange students, and many of them have worked both within Japan and overseas. In addition, approximately 1,600 exchange students from around the world have studied at Seinan Gakuin University and have used their experiences here in their careers.

In recent years with greatly improved means of global transportation and expanding international economies, studying abroad is not the unusual experience it once was. At the same time, the resources to access information from around the world as well as the ability to have contact with people around the world have become a part of daily life. However, I am convinced that students who decide to leave their home countries and study abroad to learn other cultures, traditions, and ways of thinking have an invaluable experience that will enrich their personal and professional lives. As a result, we at Seinan Gakuin University are committed to the continued expansion and development of our programs to bring Japanese and foreign students the opportunity to experience other cultures.

I want to take this opportunity to express our profound gratitude for the support and cooperation of all our partner schools over the years. Without your cooperation our program could not have become the success it is today.

50 years of international exchange is not the end, but the beginning of the next 50 years of international cooperation. As situations continue to change, our faculty and staff remain committed to further developing our exchange programs so that not only our students and alumni but also the students from abroad who study at Seinan Gakuin University will have meaningful, life changing experiences. We continue to ask for your cooperation and support as we strive to provide the best international educational experience to students who will be leaders in our global community.



Dr. Jeffrey S. Hamilton  
Vice Provost for Global Engagement  
Baylor University



It is with the greatest pleasure that I write to recognize the fiftieth anniversary of our relationship, while looking forward to many more years of cooperation, friendship and the mutual benefits derived by the exchange not only of students and faculty, but also of ideas, values, and a shared vision of academic leadership and success.

This exchange agreement was entered into in a formal declaration of fraternal relationship signed by President Abner McCall on behalf of Baylor University and by President Eiichi Funakoshi on behalf of Seinan Gakuin University on 12 July 1971. Since then, the partnership with Seinan Gakuin University has been one of Baylor University's most honored and cherished relationships.

In the fifty years since the two universities initiated this relationship, Seinan Gakuin University has celebrated its 100th anniversary in 2016, and Baylor University has celebrated its 175th anniversary in 2020. Both institutions continue to grow as leaders in their local communities with a commitment to international education, and our partnership is a fundamental element of that success.

Student exchange has been central to our relationship. To date nearly 150 students have passed in each direction, learning not only academic lessons but also enjoying rich cultural experiences and developing lifelong friendships. Faculty exchange has also been deeply meaningful for both institutions, and Seinan Gakuin has sent 18 professors to Waco, while Baylor has sent 14 to Fukuoka.

We look forward to deepening and expanding our partnership over the next fifty years and beyond.



吉林大学 学長  
Prof. ZHANG Xi  
President of Jilin University



この度、貴学の国際交流50周年にあたり、吉林大学の教職員と学生を代表し、心よりご祝福申し上げます。

貴学は創立以来、国家と国際社会に奉仕し、経済・社会・文化など様々な分野の発展に貢献できる人材を輩出してこられました。

1991年に貴学と本学が正式に交流協定を結んで以来、両校は既に30年にわたる交流と協力を展開し、200名近い教員と学生が交換留学・訪問研修など様々なプログラムを通じて多くのことを学びました。

将来を展望すると、高等教育は経済の急速な発展と社会の絶え間ない進歩を推進する上で、より重要な役割を担うことになると思われます。貴学の国際交流50周年並びに貴学と本学の交流30周年にあたり、これからも貴学の事業が順調に発展できることを心からお祈り申し上げます。また、貴学と本学が新たな時期に一層協力を深め、共に科学秘術の進歩と地域の発展に力を尽くすことを期待しております。



# 国際交流50年のあゆみ

## 50 years of international exchange

### 1970 昭和45年

- 6月 国際交流推進委員会設置
- 11月 ニューヨーク州立大学オネオンタ校/State University of New York, Oneonta(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結

### 1971 昭和46年

- 3月 国際交流準備委員会設置
- 7月 バイラー大学/Baylor University(アメリカ/USA)と姉妹校宣言文を締結



バイラー大学との  
姉妹校宣言文



- 8月 初代海外派遣留学生を  
ニューヨーク州立大学  
オネオンタ校に派遣
- 10月 フルブライト招へい教授  
受入れ開始
- 11月 国際交流委員会設置



初代海外派遣留学生  
小島平夫さん

### 1972 昭和47年

- 10月 留学生別科運営準備委員会設置

### 1973 昭和48年

- 1月 カン大学/Université de Caen(フランス/France)と国際交流協定を締結(～1988年)
- 4月 留学生別科開設



- 5月 国際交流事務室(旧国  
際交流及び留学生別科  
事務室)設置  
ロード・アイランド大学  
/University of Rhode  
Island(アメリカ/USA)  
と国際交流協定を締結



初めての受入留学生

### 1974 昭和49年

- 1月 「メアリー・エレン・ド  
ジャー奨学金」創設
- 12月 ワシタ・バプテスト大学  
/Ouachita Baptist  
University(アメリカ  
/USA)と国際交流協定  
を締結



留学生と舞鶴幼稚園児との交歓会



留学生別科の初の修了式(1974)



### 1975 昭和50年

- 3月 ウィリアム・ジュエル大学/William Jewell College  
(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結(～2004)

### 1977 昭和52年

- 1月 サン・ディエゴ州立大学/San Diego State  
University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 8月 オクラホマ・バプテスト大学/Oklahoma Baptist  
University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結

### 1978 昭和53年

- 2月 スタンダール・グルノーブル第3大学/Université  
Stendhal-Grenoble III(現 グルノーブル・アルプ大学  
/Université Grenoble Alpes)(フランス/France)と  
国際交流協定を締結



1980-81年度海外派遣留学生社行会

### 1988 昭和63年

- 2月 エクス＝マルセイユ法・経・理大学/Université de  
Droit, D'Economie et des Sciences  
D'Aix-Marseille(現 エクス＝マルセイユ大学  
/Aix-Marseille Université)(フランス/France)と国際  
交流協定を締結

### 1991 平成3年

- 1月 吉林大学/Jilin University(中国/China)と国際交流  
協定を締結
- 7月 大学主催短期語学研修(春期・吉林大学/Jilin  
University(中国/China))開始

### 1993 平成5年

- 4月 国際センター設置

### 1995 平成7年

- 5月 マーサー大学/Mercer University(アメリカ/USA)  
と国際交流協定を締結
- 8月 マンチェスター大学/University of Manchester  
(イギリス/UK)と国際交流協定を締結(～2000)



ADB福岡総会で留学生在日本舞踊を披露(1997)

### 2000 平成12年

- 6月 ボルドー・ビジネス・スクール/Bordeaux Business  
School(現KEDGE Business School)(フランス  
/France)と国際交流協定を締結(～2016)
- 7月 リヴァプール・ジョン・モーズ大学/Liverpool John  
Moore's University(イギリス/UK)と国際交流協定  
を締結(～2018)

### 2001 平成13年

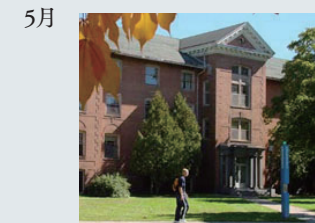
- 6月 慶星大学校/Kyungsung University(韓国/Korea)  
と国際交流協定を締結

### 2002 平成14年

- 9月 日仏共同博士課程日本コンソーシアム  
/Consortium Japonais du Collège Doctoral  
Franco-Japonais(CDFJ)に加盟

### 2003 平成15年

- 4月 マクマスター大学/McMaster University(カナダ  
/Canada)と国際交流協定を締結
- デラウェア大学/University of Delaware(アメリカ  
/USA)と国際交流協定を締結



セント・クラウド州立  
大学/St. Cloud State  
University(アメリカ  
/USA)と国際交流協  
定を締結



## 2004 平成16年

- 2月 インターナショナル・ハウス(留学生寮)設置
- 6月 夏期日本語研修(Summer Program)開始
- 11月 パリ第3新ソルボンヌ大学/Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3(フランス/France)と国際交流協定を締結(～2019)

## 2005 平成17年

- 4月 「ロード・アイランド大学指定校内規適用私費留学制度」および「ロード・アイランド大学指定校内規適用私費留学奨学金制度」創設(～2019)
- 5月 梨花女子大学校/Ewha Womans University(韓国/Korea)と国際交流協定を締結



ノース・カロライナ大学  
グリーンズボロ校  
/University of North  
Carolina at Greensboro  
(アメリカ/USA)と国際  
交流協定を締結

## 2006 平成18年

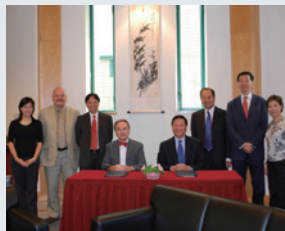
- 1月 ハワイ大学ヒロ校/University of Hawaii at Hilo(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
東呉大学/Soochow University(台湾/Taiwan)と  
国際交流協定を締結
- 8月 ニューヨーク市立大学ステテンアイランド校/City University of New York, College of Staten Island(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 11月 ボーデー大学/Bodo University(現 ノード大学/Nord University)(ノルウェー/Norway)と国際交流協定を締結

## 2007 平成19年

- 10月 法学部が東亜大学校/Dong-A University(韓国/Korea)と国際交流協定(学部間)を締結

## 2008 平成20年

- 1月 ニューメキシコ州立大学/New Mexico State University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 6月 国際文化学部が華東師範大学/East China Normal University(中国/China)と国際交流協定(学部間)を締結
- 9月 香港バプテスト大学/Hong Kong Baptist University(中国・香港/Hong Kong)と国際交流協定を締結  
福岡-釜山大学コンソーシアムに加盟(～2018)



インターナショナル・ハウス

## 2009 平成21年

- 4月 「海外語学研修奨学金制度」を創設
- 7月 セントラル・ランカシャー大学/University of Central Lancashire(イギリス/UK)と国際交流協定を締結
- 8月 ミドルテネシー州立大学/Middle Tennessee State University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結

## 2010 平成22年

- 3月 ユバスキュラ応用科学大学/JAMK University of Applied Sciences(フィンランド/Finland)と国際交流協定を締結
- 4月 大学院神学研究科がアジアバプテスト神学大学院/Asia Baptist Graduate Theological Seminaryと国際交流協定を締結
- 10月 トリノ大学/University of Turin(イタリア/Italy)と国際交流協定を締結  
2010-2011年度海外派遣留学生制度から、一部の派遣先大学で半年間留学を可能に

## 2011 平成23年

- 4月 大学院外国人等特別研修生受入れ制度を制定
- 6月 華東師範大学/East China Normal University(中国/China)と国際交流協定を締結  
高麗大学校/Korea University(韓国/Korea)と国際交流協定を締結
- 8月 上海交通大学/Shanghai Jiao Tong University(中国/China)および釜慶大学校/Pukyong National University(韓国/Korea)と「日中韓大学共同授業-東アジア文化交流プログラム(East Asian Culture and Communication)」を実施(～2012)
- 9月 大学院法学研究科がポール・セザンヌ・エクス=マルセイユ第3大学/Université Paul Cezanne, Aix-Marseille III(現 エクス=マルセイユ大学/Aix-Marseille Université)(フランス/France)と国際交流協定(研究科間)を締結
- 11月 ユタ州立大学/Utah State University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結

## 2012 平成24年

- 2月 リージェンツ大学ロンドン/Regent's University London(イギリス/UK)と国際交流協定を締結(～2019)  
アムステルダム応用科学大学/Amsterdam University of Applied Sciences(オランダ/Netherlands)と国際交流協定を締結
- 7月 コペンハーゲン大学/University of Copenhagen(デンマーク/Denmark)と国際交流協定を締結  
釜慶大学校/Pukyong National University(韓国/Korea)と国際交流協定を締結
- 12月 ファーマン大学/Furman University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
2013-2014年度海外派遣留学生制度から、1年次の学生の応募を可能に

## 2013 平成25年

- 2月 「ヨーロッパ国際機関研修(フランス、ベルギー)」開始  
「ティーチャーアシスタント研修(アメリカ)」開始
- 5月 日加戦略的留学生交流促進プログラム/Japan-Canada Academic Consortium(JACAC)に加盟
- 6月 国際文化学部がパリ高等芸術学院/Institut d'Études Supérieures des Arts(IESA)(フランス/France)と国際交流協定(学部間)を締結
- 7月 マサリク大学/Masarykova University(チェコ/Czech Republic)と国際交流協定を締結  
アジアキリスト教大学協会/Association of Christian Universities and Colleges in Asia(ACUCA)に加盟
- 8月 カレル大学/Charles University in Prague(チェコ/Czech Republic)と国際交流協定を締結(～2020)
- 11月 エトヴェシュ・ロランド大学/Eotvos Lorand University(ハンガリー/Hungary)と国際交流協定を締結  
サムフォード大学/Samford University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結



ヨーロッパ国際機関研修

## 2014 平成26年

- 2月 「ツーリズム産業研修(シンガポール)」開始
- 7月 シェナ外国人大学/University for Foreigners of Siena(イタリア/Italy)と国際交流協定を締結  
ケルン大学/University of Cologne(ドイツ/Germany)と国際交流協定を締結  
国際文化学部がチュラーロンコーン大学/Chulalongkorn University(タイ/Thailand)と国際交流協定(学部間)を締結  
ウィンチェスター大学/University of Winchester(イギリス/UK)と国際交流協定を締結(～2019)
- 8月 「アジア太平洋カレッジ」プログラム開始(～2018)
- 9月 ベルモント大学/Belmont University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
デュースブルク・エッセン大学/University of Duisburg-Essen(ドイツ/Germany)と国際交流協定を締結

## 2015 平成27年

- 2月 輔仁大学/Fu Jen Catholic University(台湾/Taiwan)と国際交流協定を締結  
アイスランド大学/University of Iceland(アイスランド/Iceland)と国際交流協定を締結



- 文学部がノーステキサス大学/University of North Texas(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 5月 アテネオ・デ・マニラ大学/Ateneo de Manila University(フィリピン/Philippines)と国際交流協定を締結  
マラヤ大学/University of Malaya(マレーシア/Malaysia)と国際交流協定を締結

- 6月 ディーキン大学/Deakin University(オーストラリア/Australia)と国際交流協定を締結



- 10月 ボルドー・モンテーニュ大学/Université Bordeaux Montaigne(フランス/France)と国際交流協定を締結
- 11月 カーソン・ニューマン大学/Carson Newman University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 12月 プリンス・エドワード・アイランド大学/University of Prince Edward Island(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結



## 2016 平成28年

- 1月 東海大学/Tunghai University(台湾/Taiwan)と国際交流協定を締結
- 2月 ワルシャワ経済大学/Warsaw School of Economics(ポーランド/Poland)と国際交流協定を締結
- 3月 高大接続プログラム「Seinan English Camp for Global Leadership」開始  
法学部がハバロフスク国立経済法律大学/Khabarovsk State University of Economics and Lawと国際交流協定(学部間)を締結
- 4月 法学部が極東国立経営大学/Far Eastern Institute of Management (RANEPa)(ロシア/Russia)と国際交流協定(学部間)を締結
- 6月 スリッパリーロック大学/Slippery Rock University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
ミネソタ州立大学マンケート校/Minnesota State University, Mankato(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
キール大学/Keele University(イギリス/UK)と国際交流協定を締結



- 8月 西南学院大学留学生同窓会ネットワーク「The Seinan International Student Alumni Network = SISAN」創設  
アベリストウィス大学/Aberystwyth University(イギリス/UK)と国際交流協定を締結  
ブリティッシュ・コロンビア大学/University of British Columbia, English Language Institute(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結  
ワルシャワ大学/University of Warsaw(ポーランド/Poland)と国際交流協定を締結  
誠信女子大学校/Sungshin Women's University(韓国/Korea)と国際交流協定を締結
- 10月 タンペレ大学/University of Tampere(フィンランド/Finland)と国際交流協定を締結(～2021)
- 11月 オークランド大学/University of Auckland, English Language Academy(ニュージーランド/New Zealand)と国際交流協定を締結
- 12月 ISGビジネススクール/ISG Business School(フランス/France)と国際交流協定を締結



ハワイ大学マノア校/University of Hawai'i at Manoa, Outreach College(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
ルーヴェン・カトリック大学/Université Catholique de Louvain(ベルギー/Belgium)と国際交流協定を締結  
モントリオール大学/Université de Montréal(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結

## 2017 平成29年

- 1月 ヴィクトリア大学/University of Victoria, English Language Centre(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結  
マーシー大学/Mercy College(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
サザンニューハンプシャー大学/Southern New Hampshire University(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結
- 2月 ヨーク・セントジョン大学/York St John University(イギリス/UK)と国際交流協定を締結
- 3月 コンコルディア大学/Concordia University(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結



- 5月 商学部が国立東華大学/National Dong Hwa University(台湾/Taiwan)と国際交流協定(学部間)を締結
- 6月 法学部がKIIT大学/KIIT University(インド/India)と国際交流協定(学部間)を締結
- 8月 国立東華大学/National Dong Hwa University(台湾/Taiwan)と国際交流協定を締結
- 10月 商学部がアムステルダム応用科学大学/Amsterdam University of Applied Sciences(オランダ/Netherlands)と国際交流協定(学部間)を締結
- 11月 ロイヤルロード大学/Royal Roads University(カナダ/Canada)と国際交流協定を締結
- 12月 オレゴン大学/University of Oregon(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結



ブリュッセル自由大学/Université Libre de Bruxelles(ベルギー/Belgium)と国際交流協定を締結



2017-2018年度海外派遣留学制度から、すべての派遣先大学で半年間留学を可能に

## 2018 平成30年

- 1月 アンジェ・カトリック大学/Université Catholique de l'Ouest(フランス/France)と国際交流協定を締結  
ノースアラバマ大学/University of North Alabama(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
サンティアゴ・デ・コンポステラ大学/University of Santiago de Compostela(スペイン/Spain)と国際交流協定を締結
- 2月 香港恒生大学/Hang Seng University of Hong Kong(中国・香港/Hong Kong)と国際交流協定を締結  
フランシュ・コンテ大学/Université de Franche-Comté(フランス/France)と国際交流協定を締結
- 4月 エンデラン大学/Enderun Colleges(フィリピン/Philippines)と国際交流協定を締結
- 5月 サンクトペテルブルク工科大学/Peter the Great St. Petersburg Polytechnic University(ロシア/Russia)と国際交流協定を締結



- ルーマニア・アメリカ大学/Romanian-American University(ルーマニア/Romania)と国際交流協定を締結
- 8月 3号館1階にグローバル・スチューデント・ラウンジ(GSL)設置

マハサラカム大学/Maharakham University(タイ/Thailand)と国際交流協定を締結



- 文藻外語大学/Wenzao Ursuline University of Languages(台湾/Taiwan)と国際交流協定を締結
- 9月 文学部がペンシルバニア州立大学アビントン校/Pennsylvania State University, Penn State Abington College(アメリカ/USA)と国際交流協定(学部間)を締結
- 10月 商学部が吉林大学/Jilin University(中国/China)と国際交流協定(学部間)を締結
- 12月 イスタンブール・セヒール大学/Istanbul Sehir University(トルコ/Turkey)と国際交流協定を締結(～2020)

## 2019 令和元年

- 4月 「Seinan Bridge Builder Program」開始(2021～募集停止)  
ヨハネスブルグ大学/University of Johannesburg(南アフリカ共和国/Republic of South Africa)と国際交流協定を締結
- 5月 商学部が東国大学校/Dongguk University(韓国/Korea)と国際交流学部間協定を締結
- 9月 サン・イグナシオ・デ・ロヨラ大学/Universidad San Ignacio de Loyola(ペルー/Peru)と国際交流協定を締結
- 12月 バレンシアカレッジ/Valencia College(アメリカ/USA)と国際交流協定を締結  
ラバト国際大学/International University of Rabat(モロッコ/Morocco)と国際交流協定を締結  
ビニャ・デル・マール大学/Universidad Viña del Mar(チリ/Chile)と国際交流協定を締結  
マルタ・アメリカン大学/American University of Malta(マルタ/Malta)と国際交流協定を締結

## 2020 令和2年

- 1月 スタディ・アブロード・ファウンデーション/Study Abroad Foundationに加盟
- 4月 これまでの女子寮(汀寮)および男子寮(碧波寮)と、留学生寮(インターナショナル・ハウス)を、学部・大学院学生および留学生の混住型国際教育寮(インターナショナルハウス)I・II・IIIとして設置  
「内規適用私費留学」を「認定留学」に改称し、「認定留学奨学金制度」を創設  
「バレンシア国際プログラム」(ウォルト・ディズニー・ワールド・リゾートにおけるインターンシッププログラム)開始
- 8月 新型コロナウイルス感染症の影響により、2020-2021年度海外派遣留学生の派遣を中止
- 11月 ビーナス大学/BINUS Universityと国際交流協定を締結

## 2021 令和3年

- 1月 トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校/Université Toulouse Jean Jaurès(フランス/France)と国際交流協定を締結



- 12月 カセサート大学/Kasetsart University(タイ/Thailand)と国際交流協定を締結



# 国際交流50年の「これまで」と「これから」

## Seinan International Exchange: Fruition and Future



外国語学部教授

宮原 哲

1976-77年

ニューヨーク州立大学オネオンタ校派遣

Akira Miyahara

Professor of the Faculty of Foreign Language Studies  
Exchange Student to SUNY Oneonta, 1976-77

西南大英専卒業後、ペンシルバニア州立大学大学院でコミュニケーション学M.A.(修士号)、Ph.D.(博士号)取得。医師や看護師と患者やその家族の関係や、女性と男性のコミュニケーション行動の研究をおこなっています。日本語、英語に関わらず、コミュニケーションはことばやジェスチャーを使って自分の考えを相手に伝える、という理解に加え、ことばを使うからこそヒトから人間へと成長する、つまり生き方、哲学という考え方をします。親子関係、男女、上司と部下など、さまざまなニーズに合わせて公民館で講演をしたり、企業で研修をしたり、また、新聞、ラジオ、テレビを通して世の中にコミュニケーションの大切さを語りかけています。

### 趣旨

西南学院大学は2021年に国際交流50年の節目を迎えましたが、最初に学生交換を行ったペイラー大学などとの相互訪問による式典などの計画は、コロナ禍によりすべて中止されました。その代わり「今、やれることだけでも」とSIFA(Seinan International Friendship Association)と学生の国際交流グループ、SGS(Seinan Global Society)の企画で、12月18日に大学コミュニティセンターでイベントを開催しました。特にSGSの学生の皆さんは、早くから入念な準備を重ね、会を成功に導いてくれました。

本稿は当日開催した二つのシンポジウムで出された意見と、学院に残っている資料などを使い、西南学院大学の国際交流の背景や、これまでに結んでくれた「果実」、そしてこれからの「課題」について述べるために紙面をいただいたものです。シンポジウムでは50年前と現在、そして未来という「時間」を軸にして古い時代に西南からの、また西南への交換留学生に直面・オンライン両方で参加してもらい、それぞれの思い出話を含む経験を語ってもらいました。もう一つのシンポジウムでは国際交流を経てさまざまな場所、そして社会的立場という「空間」を軸として、今活躍する学内外のパネリストから、今後の国際交流に求められていることについて意見をいただきました。

日本の多くの大学に先がけて始めた西南の国際交流ですから、多くの輝かしい実績は当然ですが、苦勞もあったことは明かです。過去の功績を称賛することは大事ですが、それ以上に国際交流、さらに大学、学院のあり方について新しい提案をするのも国際交流に関わってきた私たちの責任です。お読みになって苦々しい思いをされる部分もあるかもしれませんが、「情熱と愛情」をこめた言葉なので、最後までお読みくださることを願っています。

### はじめに

842,897、何の数字でしょうか。

日本で2021年に誕生した赤ちゃんの数です。これだけではピンときませんが、西南の国際交流が50周年を迎えた2021年に卒業した人たちが生まれた1999年には150万人あまり、さらにさかのぼって国際交流開始の1971年には約190万人の出生者がいたのですから、ものすごい勢いで日本の18歳人口、いや人口そのものが減少していることが分かります。このまま減り続けると、現在の経済、社会、文化活動はいや応なく変化し、西南学院大学も学生数8千人の現在の規模はこのままでいいのかという議論を進め、優秀な外国人学生に来てもらうなどの方策を明確にする時期はすでに来ているはずです。また、国としての勢いが衰退し、半面外国からの人の流れが盛んになり、「国際交流」という言葉が意味をなさなくなる時代が目前に迫っていると言えます。定員割れ、募集停止、閉校する私立大学がある中、西南も「このまま」ではいけないのは明かです。そこで西南の国際交流が果たす役割と成果について考え直してみることは、国際交流に留まらず、西南学院大学の今後についての問題提起となるでしょう。

本稿は国際交流50周年を迎え、その恩恵を受けた最古参の現役教職員として投稿する機会が与えられたものです。私は日頃から「50は49の次、周年だからと特別なことをする必要はない」と考えるのですが、数字だけの問題ではなく、一つの節目として、これまでの歴史や実績に適切な「意味づけ・価値づけ」をし、これからの歩みに向けての課題に触れ、国際交流のさらなる発展を展望する機会とすることは大切です。西南学院の学生、卒業生、教職員、そして今後西南学院で学ぶ若い人たちへのメッセージととらえてもらえれば幸いです。

### Foreword:

As part of the 50th anniversary celebration of the Seinan Gakuin University (SGU) international exchange program, SIFA (Seinan International Friendship Association) in collaboration with SGS (Seinan Global Society), a student group to support the international exchange held a ceremony on December 18, 2021. The two symposia invited several alumni, who discussed their experiences as former exchange students to and from SGU, and their expectations for the future programs.

This article discusses the historical background that led to the foundation of the SGU international exchange, its accomplishment over the last 50+ years, and what is necessary to make it further grow in the years to come. The author is the oldest current faculty member at SGU who has been given an opportunity to send a message to the present SGU students, graduates, faculty and staff, both current and retired, and most importantly future students.

### Introduction:

Japan's population has been rapidly decreasing; In 1971 when the official SGU international program was launched, nearly 2 million babies were born. The number went down to as low as 842,897 last year partly but not solely due to the COVID pandemic, which means that we are experiencing a serious and sharp decline of the population, including prospective college students in the next eighteen years and beyond. With the declining population, the economic, social, and cultural activities will inevitably "shrink," while at the same time there will be an increasing flow of internationals living and working in Japan. Time has come when we need to begin planning into the future, discussing, for example whether SGU should or could maintain its present size of 8,000 students, and if not, how it will adjust to such a large-scale change in the academic landscape. Unless we come up with feasible and effective strategies, the international exchange and SGU may become things of the past.

Considering such societal changes, we need to take a backward look at the fruit the international exchange has produced, and a forward look at the future by considering the problems and concerns it has raised. It is of paramount importance to appropriately value the past accomplishment in the hope of improving the quality of our international program.



## 「国際交流」開始までの 背景と多大な努力

西南学院大学がベイラー大学と姉妹校関係、協定校の締結をし、ニューヨーク州立大学オネオンタ校に初めて派遣留学生を送った1971年と言えば、太平洋戦争が終わって「わずか」四半世紀後です。学生の海外派遣留学、外国人学生の受け入れ、交換教授などは、今ではどこの大学でも「普通」かもしれませんが、終戦後26年、しかも「敵国」であった米国やヨーロッパ、となると教職員や学生はもちろん、社会から相当な向かい風が吹いていたことは容易に想像されます。江戸時代末期の1863年の日本は、薩英戦争直後、「これからは西洋で技術を習得して世界と向き合い、国の発展に役立てなければ」と、薩摩藩からそれまで戦っていた英国に五代友厚はじめ、20名近い若者が密航でしか渡英できなかった状態に近い、ということいすぎでしょうか。

西南学院大学の国際交流は1970年頃「降ってわいた」ようにして始まったのでは決してありません。その潮流は西南学院創立よりさらに前、今から100年をはるかに超えるところから見られたのです。西南学院が生まれた1916年よりさらに10年前、つまり江戸幕府とともに300年近い鎖国が終わりわずか40年後創立者C.K.ドージャーは他の宣教師とともに長崎から入国しました。「福岡に男子の学校を」という夢に向け、1907年には福岡神学校、1911年には福岡バプテスト夜学校を設立し、聖書、英語だけではなく米国の料理を教えるなど、国を超えた熱心な宣教活動をしていた頃から西南の国際交流の素地が築かれていたのです。米国南部バプテストが西日本での宣教のため、大阪から神戸、小倉を経て

福岡での活動を始めたのは1890年、明治時代が始まってわずか20数年後でした。

西南創立後日米関係が悪化し、宣教師が帰国を強いられる中、後に院長に就任したE.B.ドージャー（C.K.の子息）は「戦争が終わったら少しでも早く日本に戻れるように」とハワイに留まりました。この間、大西洋単独無着陸飛行に成功したリンドバーグが1931年に、ヘレンケラーが1937年に訪問など、西南学院には日本全体の様子とはかなり異なる国際交流の空気がごく自然に流れていたようです。また、E.B.ドージャーは、院長に就任するはるか前、南部バプテスト神学校を卒業直後來日し、日本の本当の姿を世界に知らせることに強い関心を抱き、高等部で聖書と英語を教える傍ら、明治天皇の御製（ぎょせい＝短歌）を英訳することを決意しました。そのことはNHKラジオでドージャー本人が日本語で「御製を通じて拝したる明治天皇の大御心」と題した放送をしたことなどから広まり、後に勲四等旭日小綬章を受賞したほどです。西南学院の「異文化交流」の歴史は100年以上前まで遡ることができることを物語っています。

学院創立50周年記念（1966年）の式辞でE.B.ドージャー院長は「世界に貢献する責任」を強調し、「西南に行けば、世界についての理解を深めることができると言われるように、そして、そこでは公平と進取・親切の学風があると言われるように、私どもは、この社会・世界に貢献したいと思う」と述べています。また、「これまで、本学院の



英語は、本を読み、外国の文明を学ぶことに向けられていたが、これからは、かかる時代よりさらに進んで、英語を話し、日本の文化を外国に知らせることに努力したい」とチャペルの挨拶で述べたのは、1938年のことでした（西南学院七十年史）。姉妹校や協定校としての文書を取り交わし、学生交換を始めたのは1971年ですが、西南にはそのはるか前から国際交流の機運が漂っていたのです。

ただ、大学として交換留学制度を開始するには目に見えない逆風も吹いていたようです。当時の資料には「国際交流反対」を感じさせるような記事は見つけられませんが、文書作成や相手大学訪問、交渉などの任に当たった大内和臣法学部教授が「国際交流15周年記念誌」（1986年）に、「協定案を上程したときの連合教授会の反応は何とも冷たく、皮肉に満ちた意見を述べる教員もいるなど、応援しようという気持ちとはとても感じられなかった」と、回顧録で書かれているとおり、全学上げての国際交流開始ではなかったようです。それでも、当時の船越栄一学長の国際交流への意欲と情熱が強い後押しとなって、西南学院大学の国際交流が正式に発足することとなりました。

九州はもちろん、日本中の大学がまだ国際交流を始めていなかった時代に西南がその先駆けとなったことは確かです。大学

米国・ベイラー大学との姉妹校宣言文に調印する船越栄一学長（前列左）。中央は国際交流推進委員会で中心的役割を果たした大内和臣法学部教授。  
[1971年ベイラー大学にて]

ぐるみで国際交流を実行していたのは1971年に海外帰国子女制度を制定した上智大学、カリフォルニア大学との交換学生制度を1968年に設置した国際基督教大学など、数えるほどしかありませんでした。南山大学が1974年、明治大学では1985年になって国際交流を大学教育の一環として始めたのですから、西南がいかに早かったかが分かります。私が1974年に文学部外国語学科英語専攻に、西南学院高校から推薦で入学した最も大きな理由が、その留学制度でした。外国為替は1ドル＝360円の固定相場から変動相場制に移行した、と言っても330円前後、1ポンドが700～800円の時代です。大学が面倒を見てくれる制度を利用しない限り、私費留学や夏休みや春休みに気軽にに行ける短期語学研修が可能な今では想像できませんが、留学など到底できない時代でした。



創立者 C.K.ドージャー (1879～1933)

1879(明治12)年に米国ジョージア州ラ・グレインジュの町で生まれ、13歳でバプテスマを受ける。マーサー大学、南部バプテスト神学校を卒業後、1906(明治39)年9月、妻モード・パークを伴い、宣教師J.H.ロウ夫婦とG.W.ポールデン夫婦らと共に南部バプテスト連盟外国宣教局(ミッション・ボード)の宣教師として来日し、宣教活動始める。1916(大正5)年4月、「私立西南学院」を創立。1917(大正6)年から1929(昭和4)年まで第2代院長として学院の発展に心血を注いだ。

## Historical Background: SGU's International Atmosphere and Great Enterprise

SGU signed an exchange agreement with Baylor University and sent the first exchange students to SUNY Oneonta in 1971, “only” a quarter century after WWII ended in 1945. SGU had to swim upstream in reaching the agreements with schools in former enemy countries only 26 years after the war, even though exchanging students and professors with universities in foreign countries has become common in Japan now.

The SGU international exchange did not just “happen” in the early 1970s but it was an outcome of the trend traced back to the time even before Seinan was founded in 1916. Ten years before the Seinan foundation, only some 40 years after the Edo period with its 300-year closed-door policy to foreign countries came to an end, C. K. Dozier, the founder of Seinan along with a few other missionaries entered Japan through Nagasaki. Dozier established a boys’ Bible school in 1907, and night Baptist school in 1911 where he and his associates taught Bible, English, and even cooking, a first endeavor to teach young students across national and cultural borders. It is even more surprising that as early as in 1890, only twenty some years into the new Meiji period, the U.S. Southern Baptist Mission Board had sent a group of missionaries to Fukuoka through Osaka, Kobe, and Kokura, marking the initial trend for Seinan to be an international academic institution.

The worsened Japan-U.S. relationship forced the missionaries to leave the country, but even then, E. B. Dozier, the founder’s son, retrieved to Hawai’i, where he thought it was easier to return to Japan just as soon as the war would end. In the meantime, Charles Lindbergh, the first

U.S. pilot who had successfully flown nonstop from New York to Paris, visited Seinan in 1931, and Helen Keller in 1937, which indicates that there was natural “air of internationalization” on the Seinan campus, quite different from many other academic institutions in Japan. E. B. Dozier assimilated to and respected Japanese culture to the extent where he was awarded the Order of the Rising Sun, Gold Rays by the Japanese government for translating Meiji Emperor’s Tanka (poems) into English, a rare honor bestowed on foreigners.

E. B. Dozier, then Chancellor stated at the Seinan 50th Anniversary Ceremony in 1966 that “We, Seinan, must contribute to the international society, and we can only do so by making our school a place and an opportunity for young people to believe they can deepen their understanding of the world, and feel the atmosphere of fair mind, enterprising spirit, and kind heart.” He also had stressed in his chapel talk in as early as 1938 the value of practical English skills; “Even though our English education has placed emphasis on reading and learning about foreign culture, we must change ahead of the time, and focus more on informing the rest of the world about Japanese culture.”

While SGU may have been blessed with a trend for internationalization, there was also invisible resentment against the start of the international exchange programs. Dr. Kazuomi Ouchi, then professor of law who had worked on negotiations with U.S. universities for the exchange program, wrote in the International Exchange 15th Anniversary Commemorative Publication that “I will never forget the cold atmosphere and



## 英仏6大学から 33か国・100大学以上へ

sarcastic comments made by some professors when the proposal for the exchange was put on the agenda at the general faculty meeting.”

With strong determination and support by Professor Eiichi Funakoshi, then president, the program officially started. SGU became one of the first to launch such international programs, and has kept its leadership role in Japan. I entered SGU primarily, if not only, because of the school-sponsored exchange program, as 1 U.S. dollar traded at about 330 yen, and 1 U.K. pound between 700 and 800 yen, which made it unrealistic and nearly impossible for individual students to study abroad on their own, unlike today when students can readily travel abroad for study including brief language training sessions in spring and summer breaks.

ニューヨーク州立大学オネオンタ校とベイラー大学との協定締結から数年の間にフランスのカン大学、米国の3大学と交換学生の合意にたどり着き、私がオネオンタに留学した1976-77年には西南から16名、米仏の大学から14名の学生を受け入れるまでに成長しました。交換留学が珍しかった、しかし日本の高度経済成長にともなう企業の海外進出、1963年の日米宇宙中継開始、64年の東京オリンピック、69年のアポロ11号の月面着陸と、その模様の同時通訳付き生放送など、国際的、特に日米間の情報交換や交流が盛んになり、学生の欧米留学への意欲は高まっていました。それだけに派遣留学は狭き門で、合格者は「西南と日本を背負って」派遣先の大学に向かったはずです。

一方で、学内では「多額の予算と手間ひまかけて学生を送り出し、受け入れるのだから、一部の学部や学科に偏らず、全学での公平性が保たれるべき」という意見が聞かれました。1971年の派遣学生が一桁から20名まで増えるのに13年を要し、30名を超えたのは2001年、実に交流開始から30年後でした。語学の勉強に勤しむ文学部、国際文化学部などでは留学への関心が高いのに対し、留学が大学での勉強に関係がないと思われたり、カリキュラム上3～4年次に一年間本学を留守にすることが困難であったりする学部からはほとんど交換学生を送り出さなかったため、不公平感が生まれたのでしょう。

このため、「国際交流にかかる予算は大学の総支出の1%未満」という方針が長い間続き、発足から30年余り急速な発展は

見られませんでした。また、最初の30年は「相互交換」と言っても日本から海外、特に欧米に留学希望の学生は多くても、日本で学びたいという海外の学生は少数でした。私は1988年から留学生別科で「異文化コミュニケーション」の授業を担当していますが、当初は「僕は日本にも、日本語にも、そして西南にも関心はないけど、『君が1年行ってあげると西南から一人留学生を受け入れられるので行ってもらいたい』と言われたから来た」と、耳を疑いたくなることを公言する米国の学生もいたくらいです。

また、今では学内に国際寮があり、市内にも外国人学生向けの住まいもあります。また、それまでは留学生が個人で民間のアパートを借りることは多くの制約のためほぼ不可能でした。そのため、大学が西新や藤崎のアパートを借り上げ、そこに留学生同士で住まわせるという状態が長く続きました。国際交流事務室（現国際センター）の職員が布団や家具などをリヤカーで運ぶ姿など、今の学生には想像もできないでしょう。当の留学生たちも、日本で日本語を勉強し、日本人学生と交流したいと願っていたにもかかわらず、米国人やフランス人同士で暮らすようでは、留学の目的を十分には果たせず、不満が強かったことでしょう。

日本からの「片思い」交流の様相を変えたのが2000年前後の日本に関心を持つ世界の若者の急増でした。日本文化、特にアニメ・マンガ、ゲームが世界で人気を博すようになり、日本語学習者も急増したのです。「西南の学生を送るために海外の学生に来てもらう」という、「下からの」協定ではない対等な交流がようやく始まりまし

た。日本、そして関東関西の大学ではなく、西南に留学したいという学生が増えたのと、西南での「1%予算」の制約が解除されたのは21世紀に入ってでした。国際交流制度を始めた1970年代の一桁の派遣生から合計50人の派遣・受入学生数に到達するまでに30年かかったのが、100人に達するにはそれから10年、そして200人に至るには5年と、急速に西南から、そして西南への留学生数は増加しています。また、2010年に半年間の留学を認めるようになって以来、別科生の方が派遣学生数を上回る状態が続いています（表参照）。

西南の国際交流制度が急成長し始めた頃、2001年から2003年まで私は国際センター所長を務めました。就任直後、米国で

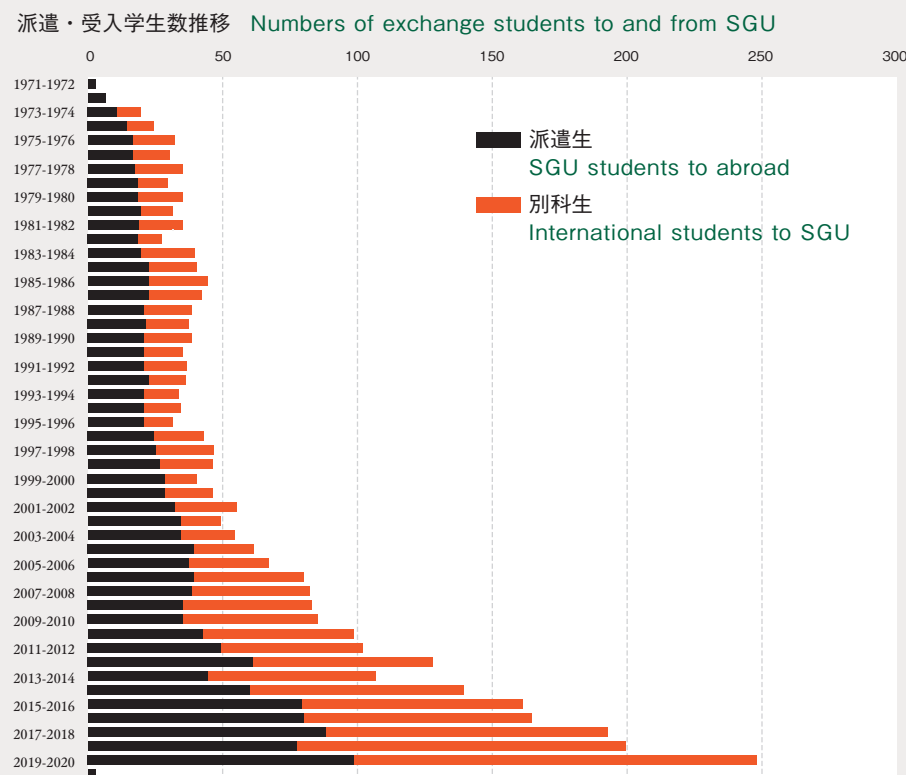
1977-78年度  
留学生オリエンテーション時写真  
（西区役所にて）  
西日本新聞掲載



9.11同時多発テロが発生し、派遣生の安否や別科生の心のケアから始まりましたが、「1%未満」の制約がなくなり、2年の任期間で20回の海外出張を経て欧米だけではなく、アジア圏の大学との協定に加え、米国、英国、カナダ、オーストラリアでの短期語学研修プログラムを作りました。その間、最も印象的だったのが、海外の学生受け入れ、教育担当者が集まる連絡協議会、NAFSAに出席したときのある米国大学の責任者との会話でした。日本と海外の大学が対等に学生交換できるようになったその頃でも、西南の留学生別科の授業はすべて英語、学年暦も欧米に合わせていた

（今でもそう）のですが、日本の多くの大学が別科を解消し、日本語で授業を受けられる程度の語学能力を持つ学生だけを受け入れるという「強気」の国際交流を打ち出していました。「西南も留学生別科は近いうちにやめようと考えている」と伝えたら、その留学責任者から、「授業を英語で受けられるのが西南の強み、やめないでほしい」という言葉が返ってきたのです。そこで、まったく日本語を勉強したことがない学生から、日本語検定1級相当の学生まで幅広く受け入れられるよう、日本語教育をさらに強化し、アイハウスを建設するなどしたのが2004年頃で、その頃から留学生別科が充実し、国際センターのスタッフも増え、派遣、受け入れともに現在のレベルにまで達しているのです。

新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、2020年から交換留学の制度は大きな影響を受けています。日本政府が海外の学生をまだほとんど入国させていない2021年現在、留学生別科はオンラインでの日本語の授業のみを開講するという状態ですが、それでも条件を満たせば受け入れてくれる世界の協定校へ本学の学生約60人が留学しています。これは、近年日本からの留学生が減少し、コロナ禍で日本のほとんどの大学が学生派遣を断念しているのとは対照的で、関東方面の大学からも注目されているほどです。



1973年 初めての留学生受入れ



## From Six Schools in the U.S. and France to 100+ in 33 Countries

1984-85年度 終了式



The exchange program started with just two students sent to SUNY Oneonta in 1971, but it quickly added a few more U.S. universities and the Université de Caen in France as partners. SGU sent 16 students and received 14 in 1976, when I went to Oneonta. A great number of students in Japan, and particularly at SGU were interested in study abroad, motivated by the general trend for international economic and cultural exchanges propelled by Japanese businesses expanding abroad, a consequence of Japan's rapid economic growth in the 1960s and early 70s, first Japan-U.S. satellite transmission in 1963, Tokyo Olympics in 1964, the first human landing on the moon by Apollo 11 and its live broadcast with simultaneous English-Japanese translation in 1969, etc. All these international events prompted many students to learn more about foreign countries, which made it very competitive for SGU students to be chosen as exchange students. Those who were chosen must have travelled to their exchange schools with pride as well as pressure.

In the meantime, SGU as an academic community had mixed feelings about the international program, as it was expected to be a program for all SGU students and faculty across the departments, yet the students who benefited from it were overwhelmingly limited to just a few academic programs. As a result, the single-digit number of students sent abroad in 1971 took 13 years to grow to 20, and 30 years to reach 30 after the initiation of the program.

The criticism against the inequality was manifested in the university's policy to limit the spending on international exchange to under 1% of the overall

budget, which remained in effect for 30 years. It is also significant that even though the program started based on reciprocal exchange of students with U.S. and French universities, the number of young students who wished to spend time in Japan was quite small. I had a student in my early intercultural communication class in the late 1980s who would publicly say that "I came here only because my professor said that by my coming here, my school is able to host one student from SGU. I have no interest in Japan, Japanese, or Seinan!"

We have come a long way since the dark era. We now have international housing on campus, in addition to apartments available to foreign exchange students, which was unrealistic not long ago, as the real state owners were very reluctant to lease their apartments to them. SGU had rented rooms in the Nishijin and Fujisaki areas and sublet them to the international students. I have witnessed SGU staff carrying futon and furniture for the students on carts! Such a

living arrangement was not appreciated by international students to SGU either, since they had chosen to learn Japanese by interacting with local students, and they ended up spending most of their out-of-class time with students from the same country, speaking English or French.

The "one-sided" exchange came to an end around the turn of the century, as young people across the world became increasingly interested in and attracted to Japanese and Japanese culture through anime/manga, and computer games. SGU was able to boost its international programs on more equal bases with their international partner institutions. It was about that time when the "1% budget policy" was lifted. The fast-growing number of incoming students clearly demonstrates the popularity of the SGU international program, as there were fewer than 10 international students on campus in the early 70s, which grew to more than 200 in 2018. A semester-long exchange was launched in 2010, which

invited many more students to SGU than those sent by and from SGU.

Table :Numbers of exchange students to and from SGU(page.16)

The increasing popularity of SGU as a destination for international students may be attributed to a few strong features of the program: International Division and the housing for international exchange students. While schools in Japan have started offering opportunities to foreign students with good Japanese skills so they can be enrolled in classes with local students, SGU has maintained its International Division where all the classes are taught in English. The SGU international program is also run according to the academic calendar adopted in European, American, and Asian countries, facilitating international students' participation in the program. I-House, an international dormitory, opened in 2004, accommodating not only international but Japanese student advisors as well, making it an actively interculturally interactive site on campus.

The COVID pandemic has been gravely affecting the international exchange at SGU, as we have not been able to welcome almost any student from abroad. Despite the difficult challenges, the students who had planned to come to Seinan have been taking their Japanese classes online, and some of them have ventured to sit in a few classes for SGU students. SGU sent some 60 students in 2021, who met the conditions set forth at their international destinations. This is in sharp contrast to many schools in Japan that have not received or sent any exchange students.

## 貴重な人間形成に寄与

学生交換を中心とする国際交流を開始して50年が経過しますが、その間派遣した学生と受け入れた学生はほぼ同数で、合計3,000人を超えています。留学生の同窓会、SIFA(Seinan International Friendship Association)の会合で感じさせられるのが「変わった人たちの集まり」(肯定的な意味で)ということです。留学をしなくても卒業後たいへんな活躍をしている西南同窓生はたくさんいるので、決して優越感に浸るための会ではありません。ただ、卒業後何十回海外に出かけ、仕事や家庭の都合で永住したとしても、大学生という18から22歳頃の吸収力も感受性も豊かな時に、海外で1年近く生活する経験は後で努力をしても叶うものではありません。

交換学生でも私費留学生でも、海外で生活すれば必ずカルチャーショックを味わいます。両親はじめいろいろな人から温かく見守られて生きてきた日本人の若者にとっては、しっかりと自己を持ち、自分を主張しないと生きていけない環境で生活し、そして外国語で勉強し、試験を受けなくてはならないわけですから、「留学」という耳には心地いい言葉も現実には決して楽ではありません。でも、だからこそそこで得るものはかけがえないのです。困難を克服し、さまざまなことに強い好奇心を抱き、そして異文化での生活のおかげで豊かに視野を広げられる若い時の留学で

は、プラス効果がマイナスを上回ることは、どの時代にも共通していると思います。

卒業後海外の大学院で学位を取得し、現地あるいは日本で教員、研究者になっている人、アフリカでインフラ整備に携わっている人、起業して海外と日本を結ぶ仕事に就いている人、会社から海外に派遣されている人、また芸能界で活躍している人、留学先で知り合った人と結婚し、日本で、あるいは海外で家族と生活している人など、平均的な大学卒とは異なる道を歩んでいる人が多いようです。これらの卒業生に共通していることは、勤務、生活の場を日本に限定していないことです。初渡航前は、外国と言えば「怖い」、「危ない」という印象しか持たないのは普通ですが、若いうちに困難を乗り越える経験をしたからこそ、初めての土地で生活したり、日本との間を行ったり来たりすることに抵抗を感じないのだと思います。異文化に好奇心を抱き「何でも見てやろう、食べてみよう、いろんな人と話して



1977年 室見インターナショナル・ハウス (留学生寮)



## 多様化、 日常化する国際交流

みよう」という積極性の賜物なのでしょう。

そして、このような経験をしているのは大学の制度を利用して留学した人に限らず、在学中交換学生ではなかった人たちの間にも多く見られるのも西南の特徴だと思います。私のゼミ生にも、卒業後米国の大学院で博士号を取得し、米国の大学で教員になっている人、地球環境工学という西南での専攻とは全然違う領域でロシア大学の博士号を取得後ハーバード大学の研究員になっている人もいます。米国やフランスなどで起業したり、海外と日本の文化を併せ持つ強みを生かして専門職に就いたりといった「グローバル人」もたくさんいます。大学の国際交流制度は利用しなかったが、世界で活躍する人が多いのは西南の「国際観」の影響だと言えるでしょう。

また、忘れてはならないのは西南への留学生です。日本が好きだったから留学したが、留学してもっと好きになって永住している人もいます。外資系企業の日本支社に勤務したり、その逆で海外の日本企業に就職したり、日本で国際弁護士として活躍したり、といった人たちがたくさんいます。

また、米仏に加えてさまざまな国から学生を迎えるようになり、私が担当する「異文化コミュニケーション」は10を超える国から40名の学生が受講し、教室が「異文化実習体験場」になっています。さらに興味深いのは、さまざまな専攻の学生が来ることです。以前は日本語、教育学、社会学といった人文系の専攻にほぼ限られていたのが、最近では地球環境学、化学、生物学、数学、看護学、コンピューター、観光学、流通科学、起業学など、類似する領域がない西南への留学に挑む海外の学生が多くなりました。彼らの卒業後の進路は当然多様性に満ちています。

創業者C.K.ドージャーは、米国で宣教師としての教育を受けたが、日本語での伝道には不安が大きかったので、南米での宣教活動を、と考えていたようです。しかし、日本で活動していた宣教師らの強い勧めで日本を伝道の地として選びました。そこから西南学院を創立したのですから、100年経った今でも若い頃の異文化経験がその後の人生に大きく影響することを積極的に迎え入れる西南の姿勢は変わっていないようです。

西南学院大学の国際交流は、1916年の西南学院創立以前からその源流が生まれ、1971年の交流協定が締結するまでの間も成長し続け、2000年以降はさらに発展し続けています。欧米中心だった協定校は1991年の中国吉林大学をはじめ、韓国慶星大学校(2001年)、台湾東呉大学(2006年)、ノルウェーボーデー(現ノード)大学(2006年)などと、2019年にはアフリカ初のヨハネスブルグ大学と、南米ではペルーのサン・イグナシオ・デ・ロヨラ大学(2019年)と協定を結び、2022年現在100を超す大学と交流しています。さらに、法学部は韓国の東亜大学、国際文化学部は中国の華東師範大学やタイのチュラーロンコーン大学、商学部の台湾国立東華大学など、学部間協定も数多くあります。大学院では神学研究科がアジアバプテスト神学大学院と協定を交わしています。

さらに2〜4週間程度の研修として、春休み・夏休みには毎年400名を超える学生が英語、フランス語、中国語、イタリア語などを学びに海外の大学に行きます。また、ツーリズム産業研修(シンガポー

ル)やバレンシア国際プログラム(ウォルト・ディズニー・ワールド・リゾートでインターンシップ)も人気です。

2004年からは本学での短期日本語研修を開始し、毎年キャンセル待ちが出るほどの盛況です。また学内で西南生が留学生のサポートをし、学生グループSGS(Seinan Global Society)は国際交流イベント、協定校紹介の動画制作や発信などに精力的に取り組んでいます。言語教育センターでは、英語だけではなく、フランス語、韓国語、中国語などを、留学生別科の学生や、それぞれの国から帰国した先輩派遣学生が後輩に教える「カフェ」を開催し、活発に活動しています。西南の国際交流の精神が源流となって、ごく日常的に異文化交流がキャンパスの至るところで展開されています。

## SGU's Contribution to the Globalizing World

SGU has exchanged more than 3,000 students over the last fifty years. The former exchange students have applied their experiences to various and uniquely international careers, whether they are in business, education, cultural exchange, family life, etc. The one year abroad during their college years offers them a once-in-a-life experience, filled with excitement and challenges that help their careers blossom later in their lives.

Their human growth is attributed to their rewarding experiences of overcoming culture shock. It may be difficult for young Japanese who are typically well protected by their parents in their early childhoods to live in an environment that demands them to be on their own. Even though the term “study abroad” may sound elegant, it entails studying, doing homework, and taking examinations in a foreign language, not an easy task. The more difficult it may be, however, the more rewarding. The positive outcomes of study abroad, especially while young far outweigh the negative, as it helps bring out strong yet adapting skills and attitudes for cross-cultural adjustment.

Many former exchange students from

SGU have found themselves in diverse professions, including but not limited to college professors and researchers after furthering their education in graduate schools in foreign countries, entrepreneurs in various industries including infrastructure business in Africa, international business, entertainment, and happy family lives with their international partners abroad. They appear to have in common a strong sense of curiosity and inquisitiveness that manifests itself in outgoing attitudes toward different cultures.

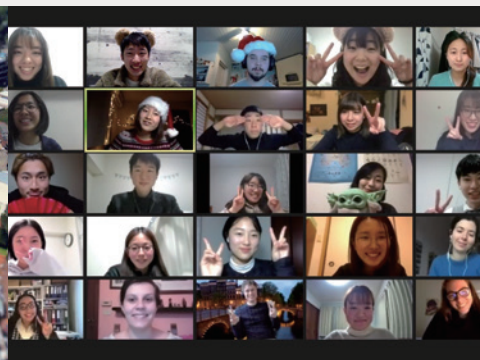
Such positive attitudes are not limited to exchange students, but shared by SGU graduates who took the initiative to study abroad during and after college. One of my senior seminar students is now a research fellow at Harvard after completing his doctorate at Columbia University in Earth and Environmental Engineering, a major quite different from English at SGU. The University should be proud to have produced a good number of “global citizens” who have a combination of Japanese and another foreign culture embedded within them and put their multi-cultural assets to work in Japan and abroad.



スリッパリーロック大学(アメリカ)



ヨハネスブルグ大学(南アフリカ)



オンライン国際交流



Global Student Lounge(3号館1階)



We should also be reminded of the international students to SGU. They have come to Japan because of their interest in culture, and their one-year stay further increased their interest, which has committed them to living here as permanent residents. Many of them found jobs in corporations that do business in and with Japan, some working as international lawyers and researchers. While SGU's early exchange partners were limited to schools in the U.S. and France, they have expanded to many countries. One Intercultural Communication class I taught several years ago had 40 students from 10 different countries, making the SGU campus a real-life venue for intercultural exchange. Their majors have diversified as well; they used to be typically such humanities as Japanese, education, and sociology, but now they include earth science, chemistry, biology, mathematics, nursing, computer science, tourism, and logistics, majors that cannot be found at SGU. This is a good indication that SGU has become an attractive destination of study abroad for students across the globe.

The SGU international exchange has continued to grow from an embryo since 1916, to official exchange agreements in 1971, and to rapid increase of international exchange agreements to 100+ schools in more than 30 countries in the 21st century: the list includes Chilin University (China, 1991), Kyung Sung University (Korea, 2001), Soochow University (Taiwan, 2006), University of Nord (Norway, 2006), University of Johannesburg, the first in Africa and University of San Ignacio de Loyola in Peru, the first in South America in 2019.

The formats of international exchange

have also diversified over the years. SGU sends over 400 students to language programs in many countries for two to four weeks during spring and summer breaks. SGU also offers intensive Japanese programs that are popular enough to have many students on the waiting lists!

International exchange has become readily available for students even without ever leaving the country. SGS, a student group recently established to promote understanding and appreciation of the value of international exchange, holds campus events, produces videos to introduce the partner institutions abroad, and supports the international students on campus. The Language Education Center offers international café programs, inviting SGU and international students for English, French, Korean, and Chinese practicum.



Cultural Exchange



ツーリズム産業研修(シンガポール)



海外ボランティア・ワークショップ  
(本学ボランティアセンター主催)

## 今後の課題

## Issues and Challenges for Further Growth

半世紀の歴史がある西南の国際交流ですが、課題もたくさんあります。時代とともに社会情勢や国と国との関係は変化します。たとえば1970年の日本の大学進学率は20%台だったのが、今や55%を超えています。しかしながら、急激な少子化にともない、入学者数が定員数を下回る大学全入時代目前と言われます。50年前は留学したというだけで特別な意味を持っていたのが今では留学で何を得たのかが重視されます。この間西南は大学として社会の変化や需要に柔軟に対応してきたのでしょうか。変化に敏感に対応しつつ、課題に取り組まない限り、国際交流だけでなく大学自体が「歴史上の出来事」となる可能性さえあるのです。本稿のしめくくりとして、国際交流の全学的理解と支持、成果の還元、大学運営のリーダーシップについて問題提起をします。

While the SGU international education has produced the abundance of positive outcomes, it is not without problems as new social issues arise, and international relations keep changing as the times change. In 1970, for example, only 20% of Japan's population advanced to college, whereas now more than 55% do. Despite the increase, however, due to the rapidly declining population, the time will come soon when everyone who wishes to enter college can, a grave challenge to private colleges. Studying abroad alone was a special accomplishment 50 years ago, whereas what one has accomplished during the study abroad is far more important today.

The question is whether Seinan has flexibly and constructively coped with the societal changes in recent years. Unless the university plans to build a stronger educational institution by sensitively responding to the changes and challenges, it may become “a thing of the past.” I would like to conclude this article by raising three major challenges that SGU faces: university-wide appreciation and support for the international exchange, need for a robust network, and stronger leadership in management.



## 留学を特別なものと考えない

学部間協定や海外ボランティア活動など、西南の国際交流は広がりを見せているものの、全学で十分な理解と支持が得られているとは思えません。派遣留学、留学生別科が特別なものと見られているのは以前から変わっていません。特に「別科」という名が示すとおり、「本科」とは名実ともに別れています。出身国の学年暦やさまざまな事情のため簡単ではありませんが、西南大生と別科生が違う大学にいるような状態は解消する必要があります。別科と本科を一緒にする、という意味で別科の発展的解消が望まれます。具体的には、西南大生に別科の授業を、別科生には西南大生の科目にもっと参加してもらいたいものです。制度としてはすでにあるものの、実際に「学内留学」に参加する学生は限られている、ということは教員の姿勢や指導の問題かもしれません。日本の学生と外国から来た学生が同じ教室で受けられる授業を増やすには、制度に加えて担当者の多様で柔軟な授業運営能力の育成が急務でしょう。

言葉は少々乱暴ですが、教員は別科生を「豊かな教材」として学内での異文化交流活性化に活用できるはずです。「同じ」学問領域でも国や地域が違えば、一方にとっての「当たり前」が他方では「非常識」かもしれません。違う考え方に目を向け、学生との、また学生間のディスカッションを活性化することは、今後の日本の大学教育に求められている授業のあり方です。「アクティブラーニング」という言葉は使われるようになったものの、実践面では多くの課題があります。留学生という貴重な教育資源の潜在的な貢献は計り知れないのではないのでしょうか。授業という公式な場での交流はもちろん、部活動などの正課外活動でも留学生と西南大生との交流を促進し、当たり前のように異文化交流が常に



International Coffee Hour

体験できる環境を提供したいものです。

国内でも地域、年齢、性、あるいは職業、会社や大学などの組織が違えば異文化です。女性と男性の関係も異文化交流です。また、ジェンダーと言ってもLGBTQ+のように多様性が認識されるようになりました。外国に行かずとも異文化を経験できるし、自分とは異なる文化を持つ人と人間関係を築き、営むためには日常の交流を通して複眼的な異文化適応能力を習得する必要があります。学内にいる100人近くの別科生はそのための絶好の交流相手です。外国人学生との交流が「マクロ的異文化体験」だとすれば、国内の年齢や性的志向の違いによって生まれる交流を「ミクロ的異文化体験」と呼べるでしょう。マクロとミクロは種類が異なるのではなく同じ延長線上にあると考え、留学生を「外国からのお客さん」ではなく、「同じ西南大生」として迎えることが必要です。

学内での異文化交流をもっと盛んにするには、これまでの欧米の大学との協定に加えて、「近くて違い」と言われるアジア圏に目を向けるべきでしょう。そして、さらに多くの留学生が西南を選んでくれるような質の高い授業を増やし、インターアクティブな授業ができる教員を採用、養成するなど、全学的な努力が求められています。国際センターが学部担当者を推薦してもらう方法に代え、教員に直接依頼するのも効果的でしょう。一部の教職員と学生から始まった西南の国際交流、さらなる維持、発展のためには全学の理解と支持、取り組みが必須です。

## Genuine Appreciation of the Value of International Exchange

Despite the constant growth and diversification of international exchange at SGU, the values and fame it brings to the university's status and reputation does not seem to be fully appreciated by the school community. International exchange is still regarded as special in college education. The SGU International Division has hosted over 1,500 students from abroad, but it is still called Bekka, literally "Separate Department." Because of the differences in academic calendars, it may be inevitable to separate the international and SGU students, but they appear as if they attend completely different schools. SGU students can be enrolled in classes at the International Division, and international students may take classes with SGU students, but the number of such within-university exchanges is quite limited, most likely to be attributed to the lack of encouragement by the SGU faculty. When more on-campus exchanges take place, the SGU professors will need to adjust their pedagogical skills to help them invite active participation in their classes by both international and SGU students together.

Professors at SGU must integrate international students as diverse educational resources into the Seinan academic community. It goes without saying that even in the "same" academic discipline the ways to approach the subject matters are different depending on where it is studied. By encouraging active discussion among Japanese and international students, for example, they should find their subjects far more meaningful and useful in the diversifying world. It is time to begin to practice "active learning" strongly advocated in today's Japan. Our international exchange students can serve as an important piece to help complete the puzzle of global education.

Furthermore, SGU should expand its network of international exchange to Japan's neighboring

countries in Asia, given SGU's location in Kyushu. Many cultures in Asia have been long regarded as "close yet far." Young students should have more opportunities to learn from and with their counterparts in these cultures. The faculty members at SGU are also required to enhance their pedagogical skills to accommodate the diverse students from many parts of the world to facilitate active discussions among international and Japanese students. Such understanding and efforts are only possible if the academic community is committed to providing its students with genuinely global opportunities to learn.



Welcome Party & Farewell Party





## 成果の還元体制を整える

多くの学生が国際交流に関わるようになり、海外での語学研修や私費留学も気軽にできるようになりました。しかし、学生を海外の大学に送り出し、外国人学生を迎え入れる業務には多額の予算や人手を要することは変わらないところか、前よりも大がかりな事業へと発展してきました。国際センターは協定校と密な連絡を保ち、学生が発発する前にはビザ取得手続きを援助し、留学の効果を上げるために準備講座を開講し、出発後は一人ひとりの学生に報告書を提出させるなど、出発半年以上前から帰国するまで細やかなお世話をしています。大学のそのような手厚い支援があってこそ、行く方も、来る方も、留学生は安心して勉強し、さまざまな知識と能力の習得、友人作りなどができています。半年から一年間、異文化で生活し、ほとんどの学生がたくましく成長して帰国します。

だとすれば、大学から国際交流の貴重な経験の機会を与えられた結果、得ることができたことを少しでも大学や他の学生、あるいは地域に還元する仕組みがあっても良いはずです。帰国後、自分の留学経験を他の学生とずっと共有したいと思っているけど、機会がないと感じている学生も多いはず。

西南に海外の大学から留学し、その後さまざまな領域で活躍している人たちも同様です。大学の価値は偏差値で決まるのではなく、卒業生が世の中でどのような働きと活躍、貢献をしているかで決まるのだと思います。学生としての貴重な時間の一部を西南学院大学で過ごし、現在世界で活躍している留学生別科の修了生は西南の貴重な財産です。今後、18歳人口が減り、受験生、入学者数の減少が懸念されるのですから、「西南出身者にはこんな人がある」ということを示す、貴重な事実として留学生のネットワークを強化、拡充させることは情報化社会にあって早く手を付けるべきことでしょう。

まずは身近なところから。保育園から大学院までそろっている西南学院なのですから、大学がこれだけ力を入れている国際交流によって得た「利益」を学院全体に還元することはできるはずです。留学経験者の貴重な体験を体系的に学生、生徒、児童、園児たちの役に立てられるよう、情報を集約し、データベースとして活用できる準備をしておきたいものです。

## Need for a Stronger Network

Now that many more students can take advantage of the international exchange programs provided by SGU, there must be a systematic way for the university to take advantage of the benefits the students have gained through the exchange. SGU has expended an enormous amount of money and human resource to send as well as accept exchange students. The CIE (Center for International Education) maintains close contact with the partner institutions, assists the outgoing students in securing admission from the respective schools and in obtaining visas, offers pre-departure orientation programs, and closely monitors the students while abroad. The CIE is constantly busy caring for the incoming students who often present urgent and possibly devastating problems while studying in an unfamiliar environment.

The benefits of the exchange distributed to and shared with the university community, however, are not comparable to the energy and time SGU has spent on it. The unique experiences along with hardships and difficulties encountered abroad could be shared with the prospective outgoing and incoming exchange students, the local community, and future SGU students.

A university's value is measured by the positive contribution by the graduates rather than how

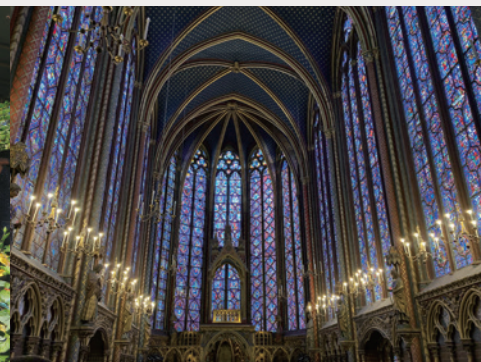
difficult it is to get in. The former exchange students to and from SGU are a strong asset to the university, and it can be utilized to help further advance the status of the university as a school where young people wish to study. Establishing a strong network of the former exchange students is not a difficult task with the abundance of social media and their accessibility. As the international exchange, with its long and successful history is one of the major strengths of SGU, it must be far more publicized as a contributing element in the overall SGU public relations purposes. Closer and stronger networks amongst the former exchange students and between SGU and them are in need.



釜慶大学サマースクール



海外ボランティア・ワークショップ(本学ボランティアセンター主催)





## 国際交流の発展には 「なる」ではなく「なす」の姿勢が必要

これからの国際交流は限られた学生や教職員だけの特別な教育事業ではなく、大学の存在意義に密接に関わります。100年以上前、当時の「国際観」の結晶として創立された西南学院と、国内の他大学に先がけて海外との交流協定を結び、50年にわたって維持、発展させてきた西南学院大学にとっての国際交流は「単なる一事業」以上の意味と価値を持っています。規模も質もこれまで伸びてきた西南学院ですが、その「伸び」の大切な部分を大学の「国際観」に魅力を感じて入学する学生と、国際交流を経験した卒業生が担ってきました。

しかし、今の西南学院大学は国際交流をはじめ、美しいキャンパス、建物などの魅力によってできた「西南ブランド」に頼っているのではないのでしょうか。確かに国際交流に関しては国内ではリーダー的な存在でした。ただ、ブランド力は綿密な課題解決や将来計画といった積極的な戦略のもとで展開されてきたというより、「何となく起こってきた」ことの集まりであるような気がします。ブランド力とは「できるもの」ではあっても「創るもの」ではありません。

創立者ドージャー親子や、1956年の創立40周年記念日に「西南が、キリストにおいて独自の存在を確保し、日本社会の光となり塩となる素地が明確にされ、世界に対しても独特な使命を感じずる地点だと信じる」と述べ、西南の国際貢献の意義を訴えた河野貞幹院長や、国際交流制度開始を強力に推進した船越栄一学長などの時代は「何となく」ではなく、信念をもって「何かをなす」という姿勢によって多くの新しいことが始められました。

その国際交流の発展を今後の大学の存続そのものととらえ、同時に肩肘張らない異文化交流がキャン

パスのあちこちで日常的に展開される大学にするには、変化を恐れずに新たなことに挑戦する強い率先力が必要です。現在の約140万人から18年後には間違いなく「842,897人」に減るのが18歳人口ですから、「このまま」でいいはずはないのです。今後の学院、大学の舵取りには思い切った改革を推し進める力、少々反対されても頑として突っぱねる責任あるリーダーシップが求められていると思います。「前からやっているから」というだけの現状維持では国際交流をはじめ、情報化、グローバル化によって瞬く間に変化する社会とその需要に応えられる人を輩出する大学であり続けることは難しいでしょう。学生にだけ新しい知識の習得を求めるのではなく、教職員がこれからのグローバル化社会で求められるリーダーとはどうあるべきかを学び、実践することも国際(=異文化)交流の大切な目的で、それこそが教職員が学生と、大学が地域社会と共に成長する「共育」です。



## Initiatives for Further Growth of the International Exchange

The present status of the international exchange at SGU is a result of the preceding pioneers' efforts to establish the academic institute over 100 years ago, and all those involved in the exchange in one way or the other, whether as students who studied abroad to or from SGU. The future of SGU depends very much upon how the international exchange will further develop.

So far SGU has been able to attract good quality students, and the attraction owes itself very much to what is regarded as "Seinan Brand" due to its internationalization, beautiful campus, and its convenient location in the nice neighborhood. The question is: Are we not depending too much on the Seinan Brand, which is not something that we have built but rather has "just happened?" SGU should not count on the fragile brand power to attract good students, but it needs stronger leadership that can take the initiative to design and implement strategic plans for further development, of which international exchange plays an important part. Things just won't happen, but we need to make them happen.

Further development of SGU can be equated to further flourishing of the international exchange. International and intercultural exchange among students and faculty should become a more ordinary scene across the campus. We should not be afraid of changes, but need to challenge ourselves to make that possible. The current 18-year-old population of 1.4 million will surely go down to below 850,000 in 18 years, which means that the status quo that SGU has so well maintained in the last 100 years will not be adequate in the very near future. Leaders in Japanese organizations including academic institutions have been known to "sit in" rather than "stand out," typical in many Western organizations, by not doing anything radical to balance the equilibrium. In the rapidly globalizing world,

an academic organization with such leaders could not do its fair share to contribute to the world by producing graduates with innovative and creative minds.

It is not just students that need to learn, but the faculty also must learn together with the students so we can figure out what competencies are required of the future leaders, and how we can help them acquire the necessary knowledge and skills that will advance our future graduates in the globalizing world. International exchange in the right direction will surely help SGU co-establish an academic institution where students and faculty can learn together by challenging one another.





## Experience of a Lifetime

Doug Augustine

サンディエゴ州立大学 1978-79年留学生別科

I was an exchange student from San Diego State University for the 1978-79 academic year, and the experience has proven to be one of the most valuable in my life. Back then, there were hardly any good Japanese language courses or opportunities for people to learn about Japan, so I was very fortunate to be selected to participate in the foreign student exchange program. Unfortunately, for me at least, one year was not enough to gain competence in Japanese, so I remained in Japan for one more year before returning to the USA to attend law school in 1980.

The decade of the 1980's was an explosive one for Japan as it amassed huge trade surpluses, liberalized its immigration laws, and implemented programs to promote internationalization. During those years, Japan was playing catchup in the financial markets and lacked in-house expertise on financial derivative transactions. For someone like me, this spelled opportunity because of the head start I had with my fair knowledge of the language and culture. I returned to Japan and was able to secure work at a Tokyo-based commodity trading company. This was followed by employment at the Tokyo headquarters of Fuji Bank (then the third largest bank in the world by assets) in its currency dealing room as a trader responsible for dollar-yen futures and option transactions listed on the Singapore International Monetary Exchange (SIMEX). Without a doubt, the time I had spent at Seinan Gakuin University was an important part of being able to get both of those jobs.

From there, I was recruited by the Philadelphia Stock Exchange to be its marketing representative in the Far East promoting the Exchange's listed currency option products throughout the Pacific Rim. Unfortunately, a global recession washed over the world and the office was closed in 1992. Financially, I was in great shape from work during the preceding years and returned to the USA to put my money to work investing in income property in Hawaii and California. While in Honolulu, I also spent some time working at a Japanese-owned property development firm. Nevertheless, I found life back in the USA to be unsatisfying and missed being in Japan.



In 1994, I returned to Japan with the intention of working in the translation industry. I spent a year at Dai-Ichi Kangyo Bank in its International Branch Operations Department (this bank would later merge with Fuji Bank to become Mizuho Bank). This was followed by a year at Nihon Seimei (one of the world's largest life insurance companies) in its International Operations Department. Next, Canada's leading life insurance company, Manulife, decided to enter the Japanese marketplace by purchasing Daihyaku Life for \$660 million (much, much more in value than the same amount today). I was brought on board to supervise the mountain of translation work generated by this transaction.

Once the transaction was finalized and normal business operations were well underway, I settled down to doing translation work on a freelance basis for a wide variety of clients covering a range of areas but mostly concentrating on legal documents such as contracts and corporate reporting materials. I purchased a house in western Tokyo and finished out my working life from my home office on the second floor. I'm a legal permanent resident of Japan, and after so many years in this country, I can't see myself living anywhere else. And it all started with one year at Seinan Gakuin University more than 40 years ago.



A small get-together hosted for some members of the program by a friendly family



Mikawa Kenichi (left), and me

## 派遣留学後40年近くを振り返り

大施戸 恒隆

法学部法律学科 1983- 84年 ベイラー大学派遣

西南学院大学を卒業後、電機メーカーに就職、電池事業に携わり、営業や事業企画を担当してきました。商談や海外工場設立の際の販売面からの支援で、駐在・出張などを通し、現地のお客様、販売会社、工場メンバーと連携を取りながら関係を築いて参りました。会社で、また海外との関わりを保ち勤務してきたことができた一つの要因は、学生時代に派遣留学生として約一年を過ごしたことであると言えます。

以下、留学で得た貴重な経験がその後どのように役立ったか、そして今後の大学のさらなる国際交流の発展に期待することを述べます。

### 1) 留学での経験がこれまでの社会人生活にどのように役立ってきたか

●交換留学派遣時は言葉・生活習慣に慣れるのにずいぶん苦労しました。海外での生活をする中で自身の足りないところを思い知らされましたが、積み残した課題は、帰国後も継続して改善に取り組みました。

●就職先は「海外」と向き合える職種を希望。地元就職を諦め、卒業後最初の就職先で定年まで勤め上げました（今では珍しい終身雇用）。就職時に望んでいた希望は、世の中の変化と共に叶い、輸出業務・海外営業に携わり海外駐在も5年半経験しました。

●ブラザ合意（ドル高を是正するためにニューヨーク、ブラザホテルで各国の担当大臣が協議した結果合意した為替安定策）直前に入社、超円高・バブル経済に遭遇、製造業の海外移転、現地化の進展など「栄枯盛衰」を現場で味わって来ました。製造拠点がアジア・中国にシフトする中、関わりが増え、その文化・習慣に直に触れることで自分なりの見識を持てるようになりました。このような経験や人間関係を築けたことは人生の財産になりました。その土台は交換留学が起点だと思っています。貴重な機会に巡り合えたことに心より感謝しています。

### 2) 後輩、大学に対して国際交流に関する要望、期待など

●コロナ禍や最近の円安で海外と直接交流を図るのが難しくなる中、「内向き」にならず世界の人々、文化、出来事に関心を示し、高い視点・広い視野で物事を見られるようになって欲しいと願っています。

●私の現役当時とは比べものにならないほど関連情報が得

られやすくなっています。立派な語学学習施設、留学生受入れ、国際寮など大学の活動に関わることで土台が築かれてくると思いますが、それらをもっと有効に利用してください。

●一方で協定校の中には高い語学力のハードルがあるように聞きます。国内で暮らしている限り、最初から海外の大学の授業を受けるのに十分な語学力を習得することは容易でないのも事実です。チャレンジする普通の学生が、夢が叶うよう、大学がもっと積極的に背中を押して欲しいです。

●50周年記念行事で課題提起されていた「帰国後の交換留学生」の母校への還元もその一つです。先輩たちの経験に基づいたアドバイスからMotivationや気づきを与え、より明確に目標に取り組んでいくことになるでしょう。例えば、現役学生と派遣OB・OGとの交流、ネットワーク化。学生からの質問や相談に対し、回答し、その内容を蓄積、横展開を図るよう大学を始め、皆で知恵を出し工夫を図っていく仕組みができないか願っております。

●大学も交換留学派遣には少なからず「投資」を行っているし、派遣学生もその「恩義」は感じているはずですので、「貴重な財産を回収」して還元することは当然理に適った考え方だと思います。

●SIFAの活動が単発的なものでなく、絶え間なく続くことを期待しています。大学の国際交流が、交換留学・海外学生受け入れ・国際寮の活動などを通して、学生が空気のように当たり前意識できるような状態になっていくことを願っています。

●シニアの参加・有効活用：交換留学制度も50年に及び、卒業後も各方面で活躍したシニアが多数居られます。元気で、意欲の高いOBの活用を提案します。例えば、国際交流活動・行事のサポート・国際寮やSGSへの助言、また、海外大学との共同授業や公開講座への聴講参加なども道を聞いて頂ければ参加したいものです。



勤続30年記念の休暇で参加したベイラー大学 Homecoming (2015年)



## 西南学院大学交換留学50周年に寄せて

田口 佳代

商学部商学科 1984—85年ワシタ・バプテスト大学

国際交流50周年、おめでとうございます。私はアメリカ南部のアーカンソー州にあるワシタ・バプテスト大学へ派遣されました。当時、提携校はアメリカとフランスだけで10校未満だったと思います。それから現在までに派遣先の国も提携校の数も増え、交換留学がますます盛んになったのだなと嬉しく思います。

私が留学した1980年代半ばにはまだeメールやインターネットなどというものはなく、アメリカから日本への連絡は電話と手紙でした。とは言え、留学期間中に自分で電話を持つことはなく、電話をかけようと思えば公衆電話を利用するか、寮の部屋に電話を引いている友達に借りるしかありませんでした。そのため、毎週末に手紙を書いていました。今では通信手段が増え、日本の情報も簡単に手に入るようになり、ホームシックになることもあまりないのでしょう。

私が留学を通して得たものは基礎的な英会話力は勿論ですが、一番に挙げたいのは忍耐力です。留学中に外国人として注目を浴びること、ホームシック、英語で自分の意志を思うように伝えられないもどかしさ、ルームメイトとの関係など耐えなければならないことがたくさんありました。

元々忍耐力はある方でしたが、留学によってさらにそれが強くなりました。また、留学期間中は人生で一番勉強しました。宿題やレポートに追われる毎日で集中して物事に取り組む力がかなり養われました。そして、長期休暇中や帰国前の旅行も素晴らしい体験でした。有名な観光地を巡るのも楽しいのですが、それに加え色々な人達と出会

職場にて



い、ハプニングが起こった時にどう対処するかということも学びました。現在まで仕事に於いて、プレッシャーの中で冷静に判断して行動することができるのは留学期間中に経験したことがベースになっていると感じます。

最近ではバーチャル体験が簡単にできるようになり、日本にいなから海外に行ったような体験をすることもできます。コロナ禍で海外との行き来が難しい今、バーチャル体験は非常に便利で有効なツールでしょう。ただ、やはり自分が現地に行かないと体験できないことがあります。人との交流はその人と実際に会わないと感じられないものがあります。ハプニングも実際に行かないと起こりません。私が体験したやっかいなことは、飛行機に関わること。アメリカではストライキでフライトがキャンセルになったり、天候により飛行機が遅延したりということが頻繁に起こります。最初はどのようにいかに分からず、外国でこのようなことに遭遇するとかなり心細いものです。しかし2回、3回と回を重ねると落ち着いて対処できるようになります。このようなことはバーチャルな世界では経験できません。再び自由に海外と往来できるようになるまで、まだしばらくかかるかもしれませんが、可能になった時には在校生のみなさんも海外へ行って、実際に体験して頂きたいと思います。留学の一番の目的は語学習得となることが多いでしょう。けれど、語学はあくまでも人と意思疎通するための手段です。その語学を使って何をするのかを考え、実際に現地で体験することによって、自分の将来に生かせる何かを得ることができ、また人生がより豊かなものとなるでしょう。多くの学生がこの留学制度を利用して、素晴らしい体験をしていただけますように。西南学院大学交換留学制度の益々のご発展を祈念いたします。



大学の寮で友人達と



留学生アドバイザーの先生宅で



Romain Bouillaut

エクス・マルセイユ第三大学 2002—03年留学生別科

Back in France, when I expressed my wish to go to Japan to my Japanese teacher, he said to me: “We have exchange programs with universities in Sapporo, Tokyo and Fukuoka. Since you’re a law student, I suggest that you go to Tokyo, where the university is famous for its law program.” Even after looking up the universities on the Internet, I was still on the fence, and ended up choosing Fukuoka and Seinan Gakuin only because I thought that Tokyo was too crowded and Sapporo was too cold. This decision, taken without putting too much effort in it, turned out to be the best of my life. The type of experience that

changes you, influences the rest of your existence and stays carved into both memory and heart. From the moment I set foot in the university, I knew that I had made the right choice. The staff was beyond helpful, classes were interesting and facilities were great, but more than everything else, all the exchange students got on extremely well and we still see each other even 20 years after we all returned home.

I cannot find one moment which was not great during the 10 months of the exchange program. Meeting friends, learning Japanese and studying other topics, joining club activities, and enjoying life in Fukuoka all made this experience unforgettable. The type of memory that you think may be too good to be true but did happen. Even now I remember that coming back to France was way harder than going to Japan, which says a lot about how I enjoyed my time at Seinan Gakuin. After my return, life came back to normal, but my memories of the exchange program guided me through the years. Going abroad for a long time is always a good occasion to learn about yourself but going to Seinan Gakuin helped me channel this experience and turn it into a set of tools that helped me take the right decision in both my professional and personal life.

After finishing my studies, I started to work in France, but felt that I was not done with Japan yet. 7 years ago I decided to go back to Japan and live there for a while, certainly influenced by all the positive memories I had from my time in Fukuoka.

Now I happily live in Tokyo, working as a knowledge lawyer at Hogan Lovells, an international law firm, fully utilizing my Japanese, English and French abilities. Unfortunately, I do not have the occasion to go back to Fukuoka as much as I would like to, but the friends I made, the memories I have and the lesson I learned help me every day, and to all the students who are ready to join the exchange program, I would recommend to fully live the experience, join the club activities and be as curious as you can!



## 転機となった交換留学

福栄 奈津子

文学部外国語学科 2002ー03年 ボルドー・ビジネススクール

私は交換留学プログラムでフランス・ボルドーのビジネススクールに留学しました。英語専攻で、経営学も勉強したことがないにもかかわらず、新しいこと、皆と違うことをしてみたいという希望に耳を傾けてもらい、留学生として選んでもらえたことは、私の人生のターニングポイントとなりました。

このまま英語だけを勉強するのが良いことなのか、英語圏に行くのが良いのか悩んでいた時に学内の掲示板で募集を見て、どうしても行ってみたくて強く思ったことを今でも鮮明に覚えています。

ただ、フランスなのに授業は英語、学んだことのない科目、学生は世界からの留学生、街中はフランス語ということで当時は大変楽しくも苦労も多かったです。学部生で1年弱という期間は短く、英語も中途半端なのではないか、という焦りもありました。

しかし、そこから香港大学での修士を経て、英字新聞ジャパントタイムズで働くな

ど、色々な経験をし、現在はフランスのAFP通信社東京支局で記者をしています。私は英語で記事を書いているが、正直、まさかまたフランスと縁を持つようになるとは思っていませんでした。そして、幸運にも留学先で得た友だちと今もつながっており、支えてもらっています。

私にとって、学生の時のこのような経験は何事にも代えがたい貴重なものですし、この経験があれば今の自分はなかったと思います。

ですので、もし可能であれば、西南学院大学の学生の皆さんにはぜひ交換留学に挑戦してみしてほしいです。それは言葉を学ぶということだけではなく、自分の目で外の世界を見て、様々な価値観や考えに触れるチャンスだからです。ソーシャルメディアが普及し、直接人に会ったり、景色を見なくても情報があふれています。だからこそ、その外に出ることが大事だと感じています。

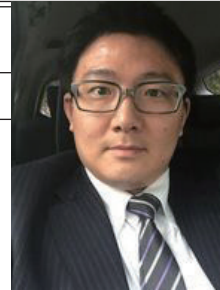


東京五輪開会式にAFP通信社の同僚と(2021年7月)

## 祝！西南学院大学交際交流50周年

夏 建平

2007年文学部外国語学科卒業



私は中国上海出身で、2001年10月に来日しました。中国で高校受験に失敗し、人生をリセットする目的で日本に来ました。一人で生きていけるよう日本語の勉強と生活技能を身につけるために努力しました。今年で日本での生活は21年になりますが、その間以下の道を歩んできました。

2001年～03年 日本語学校

2007年3月 西南学院大学文学部外国語学科卒業  
(英語専攻宮原ゼミ)

2007年4月 就職

2010年7月 退社、株式会社ブリッジを設立(現在に至る)

日本の大学を選ぶ際、私が好きな英語の教育環境が優れていること、上海でも名前が知られている西南学院大学、そして文学部外国語学科英語専攻に入りたいと思い準備をしました。卒業後は、日本語のコミュニケーション力だけではなく実務経験も身につけたいと思い、日本での就職を希望し、一つだけ内定をもらったのが不動産会社でした。その会社に3年半務めた後、自分で主に外国人を相手とした不動産会社を起業し、現在に至っています。

【西南学院での4年間】

私は日本に来てよかったと思っています。特に西南学院大学での4年間の留学生活は私の人生にとってとても重要な4年間でした。この4年間で私は日本語を上達させることができましたし、日本という国への認識と理解を深めることができました。日本に来て最初の頃は、当然日本語がうまく話せませんでした。たとえば、アルバイト先で好み焼きを作るときに、お客さんから「焦げないように」と声をかけられても、その意味がわかりませんでした。それでも、アルバイト先の日本人の同僚から習った「これもおしえんとわからんか ぼけ」という言葉を、自分でも流暢に使えるようになった時は、自分のことをカッコ良いと思いました。

率直に言えば、大学で日本語能力はそこまで伸びなかったのですが、学生生活の4年間で得たことが、現在の社会人としての生活にきっとつながっていると思います。日本人とコミュニケーションを取るのもだんだん自信がつくようになった時期でした。

【西南学院への思い】

私の認識では西南学院大学は、福岡地域のブランドのような存在です。ですので、私は決して西南学院のブランドに泥を塗ることはできないと心から思いました。私たちひとりひとりの努力が西南学院の栄光につながっていくと信じています。そのような気持ちは、社会人になった現在も、ずっと薄れずに本当に母校を誇りに思っています。

在学生の皆さん、それに今後西南学院大学に入学する皆さん

んには、時間を大切にして、大学生活を有意義に過ごされることを願います。授業の単位だけでなく社会で通用するよう、できれば一つでも二つでも国家資格が取れるように努力をしてもらいたいです。人並みでは社会では通用しません。目標を立て、そして目標を達成する喜びを感じてもらいたいです。もし期待する結果を伴わないとしても、後でそのプロセスを生き、より深い自己分析ができるはずです。

「自分はどんな人間？」→「自分はなになりたい？」→「どうすればいいかをまず自力で考える」→「自画像が見えてくる」という具合です。最初は漠然としているかもしれませんが、ずっとそういう意識を保つことができれば何年後かに自分の将来像が見え、本当に成功できます。

【後輩へのアドバイス】

私が代表を務める会社、Bridgeの一字一文字を頭文字にして考えると、Belief 信用される自分になるよう、まずは自分を信じる：信用はお金では買えない  
Responsibility 責任を持つ  
Improvement 常に向上心を持つ  
Do 先頭に立って積極的にやる  
Globalization グローバルな視点で物事を考える  
Enthusiasm 情熱を持って仕事をしよう  
と言えます。

【わたしの悟り】

最後にこれまでの国際交流を通した日本での生活で得ることができたことをまとめてみます。

- 1.日本語能力UP 日々勉強
- 2.三識(知識、見識、胆識)の養成  
知識は本から、またコミュニケーションを通して人から学びます。次にその知識をしっかり吸収して自分のものにします。物事に対する自分の見解を築きましょう。胆識は、できるかどうか、言えるかどうか、度胸があるかどうか判断することです。
- 3.謙虚な気持ち
- 4.ほほえみ
- 5.人が変わらなく、自分を変えるような思いやり
- 6.難しいからこそ、やりがいがある
- 7.口より実績
- 8.プラス思考
- 9.相手を尊重する
- 10.感謝の気持ち



2007年卒業式当日



## How Seinan Sparked my Spirit of Adventure



国立台湾大学卒業式(筆者は左から4番目)

### Brianna Levin

マーサー大学 2018年留学生別科

Hi! My name is Brianna Levin. In Fall 2018 I moved to Fukuoka to participate in a semester exchange program with Seinan Gakuin University. After my semester at Seinan, I studied at Al Akhawayn University in Ifrane, Morocco in Spring 2019. After a year filled with adventure, I returned to the United States to complete my bachelor's degree at Mercer University, my home university in Macon, Georgia. Shortly after I returned home, I missed the joy and challenge of living abroad. I quickly began searching for opportunities to move outside my home country after graduating. Since I had such a positive experience as an exchange student at Seinan Gakuin, I was especially interested in opportunities to return to East Asia. I majored in global health in college, so I was delighted to find a new Master in Global Health program at National Taiwan University. I was accepted into National Taiwan University's graduate program. After months of uncertainty over my visa due to the COVID-19 pandemic, I moved to Taipei in September 2020 to begin a new adventure. After successfully defending my thesis and graduating from my master's program, I accepted a global health research assistant position at National Taiwan University. I worked together with Malawian and Taiwanese project partners to manage a university social responsibility project including school

garden and global health capacity building components. I recently moved back to the United States to begin a Master in Nursing program with hopes of gaining skills to contribute further to global health equity. During my semester at Seinan Gakuin, I formed what are now some of my most cherished memories and friendships from my time at university. Experiencing the ups and downs of culture shock, relationships, homesickness, adventures, language barriers, and self-discovery all while navigating growing up together created deep bonds between my classmates. We learned how to listen to each other at a deeper level and to recognize the ways in which our cultures shape how we interact with the world. The friends I met at Seinan now live all around the world. I have had the opportunity to fly across the globe to reunite with several friends I met at Seinan, and throughout the pandemic I have stayed in touch with Seinan friends through video chats and messages. I did not have many opportunities for exchange with Asian cultures when I was younger, and my experiences living in Japan directly led to my decision to start my postgraduate life in East Asia. My semester at Seinan also has had positive impacts on my professional growth. The cultural communication skills I developed during my exchange semester have been vital to my recent role managing a diverse team of international students collaborating with project partners in Malawi and Taiwan on a global health project. Overall, my life is so much richer because of my semester at Seinan. I highly recommend studying abroad for a semester or year if you have the opportunity! Even after leaving Japan, my exchange experience at Seinan is continuing to give me new opportunities to explore the world and grow as a person.

## 台湾留学が私に教えてくれたこと

### 村田 莉子

国際文化学部 2017-18年 東呉大学

国際文化学部所属していた私は、第二外国語に中国語を選択しました。最初に関心など全くなく、アメリカやカナダへの留学を目指していたこともあり、英語の方に精を出していました。そんなとき、当時中国語を教えてくれていた先生から「中国語暗誦大会に出てみないか」と誘いを受けました。全てはその先生の一言から始まりました。そして練習を重ねるうちに私は中国語という言葉に惹き込まれていきました。

当時台湾の友人がいた私は、彼女の話す中国語に憧れ、台湾への留学を目指し始めました。地道な努力の末、第一希望だった東呉大学への交換留学が決まり、楽しみにしていた台湾での生活が始まりました。留学中は出会ったことのない自分の姿や感じたことのない様々な感情にぶつかりました。そんなとき、台湾の友人たちはいつもそばで私を励まし続けてくれました。私に嬉しいことがあったとき、彼らは自分のことのように一緒に喜んでくれました。初めはそんな彼らの優しさに応えられない自分に苛立ち、「謝謝」のたった一言しか言えない自分が情けなくて仕方ありませんでした。「いつか彼らに恩返しをしたい」という想いを胸に、私は彼らとの1日1日を大切に過ごしました。そうしてあっという間に10ヶ月の交換留学は終わりを迎えました。

帰国後は中国・台湾の映画監督の通訳や免税店でのアルバイトなど、学生のうちにできる様々なことに挑戦しました。台湾への留学や帰国後の体験を通して、台湾の方々がどれだけ日本を好きでいてくれているのか実感するとともに、日本という国の素晴らしさを知ることができました。そして今度は日本へ来た台湾の方々に日本の魅力・文化を伝えられるような人になりたいと思うようになりました。

私は今、株式会社星野リゾートで働いています。そこにはもちろん日本の方だけでなく、海外出身のお客様もいらっしゃいます。日本語が堪能な中国・台湾の方でも、ふと私が中国語で話しかけると、それまで難しそうな顔をしていたお客様が笑みを浮かべ、興味を持って私と話してくださいます。入社して2年が経とうとしています。これまでで一番印象に残っている言葉、それは「ありがとう。あなたがいてくれてよかった」です。学生時代に自分を変えてくれた中国語という言葉を通じて、誰かの役に立てたということが何よりも嬉しかったです。

中国語という言葉、中国語の先生、台湾人と出会い、私の人生は大きく変わりました。今留学を目指している、留学がもう決まっている方々に私から伝えられること。それは、「後悔しないこと。失敗してもいいからまずは挑戦してみる」。これはある台湾の友人が留学前、私にかけてくれた言葉です。この言葉は今でも私の頑張る糧になっています。人との出逢いは人生を豊かにする。それを実感できるのも留学の醍醐味だと私は思います。

そして私はこれからも、台湾人が愛する「台湾」という素晴らしい場所、中国語という魅力的な言語をもっとたくさんの人に知ってもらえるよう伝え続けていきます。





西南学院大学  
国際交流のこれから

国際センター所長  
清宮 徹



1971年に始まった交換留学は、2021年に国際交流50周年を迎えました。本学の国際化の实り多い歴史をととても誇りに思います。西南の交換留学制度は大学の国際交流の先駆けとなり、大きな注目を集めました。当時の学長は「国際性は西南の特色の一つ」としていくことを明言しています。コロナによる中断の時期もありましたが、国際性はこれまでの西南の伝統を作り上げてきました。

今後50年を見据えて本学の「国際交流のこれから」を考える時、どのような人間を育成するかという議論が重要です。西南の国際化の方向性を示唆するような人物像をロールモデルとして示すことが、理解の近道になると思いました。国際化の流行りに流されることなく、本学の建学精神にも結び付くような国際人の育成を考えていかねばなりません。そこで頭に浮かぶのは、本学とのかかわりの深い「中村哲」さんです。ベジャワール会現地代表として、アフガニスタンでは医療活動のみにとどまらず灌漑工事など人道的活動にも従事された姿は、本学の学生に一つの国際化の在り方を示すものです。つまり、キリスト教主義教育を背景とした人間観、多様性を尊重する価値観ならびに国際協力の理念に基づき、人々に寄り添い世界平和を希求する姿勢が、本学の目指す国際化の方向性ではないでしょうか。異なる価値観や文化を尊重しつつ、意見を積極的にぶつけ合い、相互の理解を深めながら、より良い関係を積極的に構築するコミュニケーション能力を重視します。また、世界への関心と問題意識をもち、地域および国際社会が抱える多様な課題の解決に率先して取り組み、他人事とすることなく自分事として、自ら思考力をもって問題解決する行動力を要請していかねばなりません。本学が目指すこれからの国際化は、多様なプログラムや施設・環境を通じて、「西南モデルの国際化」を構築していくことに他なりません。

2022年7月6日に大学改革ミニフォーラムとして、「西南の国際化を考える」という機会を作り、教職員の方々と意見交換することができました。国際化に関する多様な意見や熱い思いを共有しました。このような対話を重ねていながら、「西南モデル」をともに作っていくことが大事と考えます。キャンパス内で留学生が「そこにいる」という従来観から抜け出し、留学生と「共に学ぶ」という学習環境を作っていきたいと思います。教室に留学生が常にいて一緒に議論したり、遊びに行ったりする姿です。また目的別の研修や語学研修の短期プログラムから、認定留学や交換留学のような中長期留学など、時代と学生のニーズにあったプログラムを準備します。

「国際交流のこれから」を考える時、国際交流をもっと身近なものに感じようしたいと思います。最終的には、教職員や学生の意識変革が大事と考えます。語学力の向上だけが国際化ではありません。自己実現や夢へのチャレンジの場、そして自分自身を変革する場としての国際交流にしてもらいたいと思います。本学の第一の特徴として、国際交流が大きな柱になることは間違いありません。先輩たちが築いた伝統をもとに、教職員、在学生、未来の西南大生と共に新たな西南の国際交流と国際化をともに実践していきましょう。

国際交流協定校一覧(交換学生数)(2020-2021年度まで)  
Partner Universities (Student Exchange until 2020-2021)

大学間協定(学生交換) University-level Bilateral Agreement (Student Exchange)

国名 Country	大学名 University Name	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
アフリカ Africa				
モロッコ Morocco	ラバト国際大学 International University of Rabat	2019	0	0
南アフリカ共和国 Republic of South Africa	ヨハネスブルグ大学 University of Johannesburg	2019	0	0
アジア Asia				
中国 China	華東師範大学 East China Normal University	2011	14	4
	吉林大学 Jilin University	1991	26	39
香港 Hong Kong	香港恒生大学 Hang Seng University of Hong Kong	2008	0	5
	香港バプテスト大学 Hong Kong Baptist University	2018	8	32
インドネシア Indonesia	ビーナス大学 BINUS University	2020	0	0
マレーシア Malaysia	マラヤ大学 University of Malaya	2015	1	1
フィリピン Philippines	アテネオ・デ・マニラ大学 Ateneo de Manila University	2015	0	3
韓国 Republic of Korea	梨花女子大学校 Ewha Womans University	2005	18	8
	高麗大学校 Korea University	2011	12	0
	慶星大学校 Kyungsung University	2001	33	55
	釜慶大学校 Pukyong National University	2012	12	14
	誠信女子大学校 Sungshin Women's University	2016	8	2
	輔仁大学 Fu Jen Catholic University	2015	2	7
台湾 Taiwan	国立東華大学 National Dong Hwa University	2017	0	2
	東呉大学 Soochow University	2006	16	28
	東海大学 Tunghai University	2016	3	8
	文藻外語大学 Wenzao Ursuline University of Languages	2018	0	2
タイ Thailand	マハサラカム大学 Mahasarakham University	2018	0	3
	カセサート大学 Kasetsart University	2021	0	0
ヨーロッパ Europe				
ベルギー Belgium	ルーヴァン・カトリック大学 Université Catholique de Louvain	2016	4	4
	ブリュッセル自由大学 Université Libre de Bruxelles	2017	1	0
チェコ Czech Republic	マサリク大学 Masarykova University	2013	8	17
デンマーク Denmark	コペンハーゲン大学 University of Copenhagen	2012	9	33
フィンランド Finland	ユバスキュラ応用科学大学 JAMK University of Applied Sciences	2010	18	31
フランス France	エクス＝マルセイユ大学 Aix-Marseille Université	1988	72	52
	ISGビジネススクール ISG Business School	2016	2	0

国際交流協定校 Partner Universities:  
34か国100大学 100 universities in 34 countries/regions

32か国84大学 84 universities in 32 countries/regions

国名 Country	大学名 University Name	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
	ボルドー・モンテーニュ大学 Université Bordeaux Montaigne	2015	14	7
	アンジェ・カトリック大学 Université Catholique de l'Ouest	2018	1	0
	フランシュ・コンテ大学 Université de Franche-Comté	2018	1	3
	グルノーブル・アルプ大学 Université Grenoble Alpes	1978	94	57
	トゥールーズ大学ジャン・ジョレス校 Université Toulouse Jean Jaurès	2021	0	0
ドイツ Germany	ケルン大学 University of Cologne	2014	10	5
	デュースブルク・エッセン大学 University of Duisburg-Essen	2014	4	6
ハンガリー Hungary	エトヴェシュ・ロラード大学 Eotvos Lorand University	2013	11	4
アイスランド Iceland	アイスランド大学 University of Iceland	2015	2	3
イタリア Italy	シエナ外国人大学 University for Foreigners of Siena	2014	5	13
	トリノ大学 University of Turin	2010	22	24
マルタ Malta	マルタ・アメリカン大学 American University of Malta	2019	0	0
オランダ Netherlands	アムステルダム応用科学大学 Amsterdam University of Applied Sciences	2012	14	22
ノルウェー Norway	ノード大学 Nord University	2006	27	21
ポーランド Poland	ワルシャワ大学 University of Warsaw	2016	3	2
	ワルシャワ経済大学 Warsaw School of Economics	2016	0	8
ルーマニア Romania	ルーマニア・アメリカ大学 The Romanian-American University	2018	0	0
ロシア Russia	サンクトペテルブルク工科大学 Peter the Great St. Petersburg Polytechnic University	2018	0	0
スペイン Spain	サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学 University of Santiago de Compostela	2018	0	0
イギリス U.K.	キール大学 Keele University	2016	2	3
	セントラル・ランカシャー大学 University of Central Lancashire	2009	16	22
	ヨーク・セントジョン大学 York St John University	2017	7	13

中南米 Latin America				
チリ Chile	ビニャ・デル・マール大学 Universidad Viña del Mar	2019	0	0
ペルー Peru	サン・イグナシオ・デ・ロヨラ大学 Universidad San Ignacio de Loyola	2019	0	0
北米 North America				
カナダ Canada	コンコルディア大学 Concordia University	2017	0	2
	マクマスター大学 McMaster University	2003	38	44
	ロイヤルロード大学 Royal Roads University	2017	0	1
	モントリオール大学 Université de Montréal	2016	3	3
	プリンス・エドワード・アイランド大学 University of Prince Edward Island	2015	2	1



国名 Country	大学名 University Name	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
アメリカ U.S.A	ベイラー大学 Baylor University	1971	143	141
	ベルモント大学 Belmont University	2014	8	7
	キャンベル大学 Campbell University	2018	2	0
	カーソン・ニューマン大学 Carson Newman University	2015	7	1
	ニューヨーク市立大学スタテンアイランド校 City University of New York, College of Staten Island	2006	21	39
	デラウェア大学 University of Delaware	2003	14	27
	ファーマン大学 Furman University	2012	10	18
	マーサー大学 Mercer University	1995	25	14
	マーシー大学 Mercy College	2017	2	0
	ミドルテネシー州立大学 Middle Tennessee State University	2009	28	30
	ミネソタ州立大学マンケート校 Minnesota State University, Mankato	2016	6	1
	ニューメキシコ州立大学 New Mexico State University	2008	11	16
	オクラホマ・バプテスト大学 Oklahoma Baptist University	1977	79	38
	ワシタ・バプテスト大学 Ouachita Baptist University	1974	130	99
	サムフォード大学 Samford University	2013	4	0
	サン・ディエゴ州立大学 San Diego State University	1977	72	57
大洋州 Oceania	スリッパリーロック大学 Slippery Rock University	2016	3	1
	サザンニューハンプシャー大学 Southern New Hampshire University	2017	4	15
	セント・クラウド州立大学 St. Cloud State University	2003	17	27
	ニューヨーク州立大学オネオンタ校 State University of New York, Oneonta	1970	102	98
	ハワイ大学ヒロ校 University of Hawaii at Hilo	2006	25	22
	ノース・アラバマ大学 University of North Alabama	2018	3	0
	ノース・カロライナ大学グリーンズボロ校 University of North Carolina at Greensboro	2005	33	59
	オレゴン大学 University of Oregon	2017	3	0
	ロード・アイランド大学 University of Rhode Island	1973	49	65
	ユタ州立大学 Utah State University	2011	3	4
オーストラリア Australia	ディーキン大学 Deakin University	2015	0	2

学部・研究科間協定 Faculty-level Agreement

国名 Country	大学名 University Name	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
外国語学部 Faculty of Foreign Language Studies				
アメリカ U.S.A	ペンシルバニア州立大学アビントン校 Pennsylvania State University, Penn State Abington College	2018	—	—
	ノースアラバマ大学 University of North Alabama	2021	—	—
	ノーステキサス大学 University of North Texas	2015	—	—
商学部 Faculty of Commerce				
中国 China	吉林大学 Jilin University	2018	—	—
オランダ Netherlands	アムステルダム応用科学大学 Amsterdam University of Applied Sciences	2017	5	0
韓国 Republic of Korea	東国大学校 Dongguk University	2019	0	0
台湾 Taiwan	国立東華大学 National Dong Hwa University	2017	8	0
法学部 Faculty of Law				
インド India	KIIT大学 KIIT University	2017	—	—
イタリア Italy	トリノ大学 University of Turin	—	0	1
オランダ Netherlands	アムステルダム応用科学大学 Amsterdam University of Applied Sciences	—	1	5
韓国 Republic of Korea	東亜大学校 Dong-A University	2007	—	—
ロシア Russia	極東国立経営大学 Far Eastern Institute of Management (RANEPA)	2016	—	—
	ハバロフスク国立経済法律大学 Khabarovsk State University of Economics and Law	2016	—	—
国際文化学部 Faculty of Intercultural Studies				
中国 China	華東師範大学 East China Normal University	2008	—	—
フランス France	パリ高等芸術学院 Institut d'Études Supérieures des Arts (IESA)	2013	—	—
タイ Thailand	チュラーロンコーン大学 Chulalongkorn University	2014	2	5
神学研究科 Graduate School of Theology				
アジア Asia	アジアバプテスト神学大学院 Asia Baptist Graduate Theological Seminary	2010	—	—
法学研究科 Graduate School of Law				
フランス France	エクス＝マルセイユ大学 Aix-Marseille Université	2011	—	—

語学研修協定校 Language training partner schools

国名 Country	大学名 University Name	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
アジア Asia				
フィリピン Philippines	エンデラン大学 Enderun Colleges	2018	125	—
北米 North America				
カナダ Canada	ブリティッシュ・コロンビア大学 University of British Columbia, English Language Institute	2016	126	—
	ヴィクトリア大学 University of Victoria, English Language Centre	2017	206	—
アメリカ U.S.A	ハワイ大学マノア校 University of Hawai'i at Manoa, Outreach College	2016	221	—
	バレンシアカレッジ Valencia College	2019	—	—
ヨーロッパ Europe				
イギリス U.K.	アベリストウィス大学 Aberystwyth University	2016	226	0
大洋州 Oceania				
ニュージーランド New Zealand	オークランド大学 University of Auckland, English Language Academy	2016	160	—

コンソーシアム Consortium

	協定締結年 Start Year	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
日仏共同博士課程日本コンソーシアム Consortium Japonais du Collège Doctoral Franco-Japonais (CDFJ)	2002	—	—
アジアキリスト教大学協会 Association of Christian Universities and Colleges in Asia (ACUCA)	2013	0	6
日加戦略的留学生交流促進プログラム Japan-Canada Academic Consortium (JACAC)	2013	0	2

国際交流協定に基づく教員交換(2020-2021年度まで) Faculty Exchange with Partner Universities (until 2020-2021)

地域 Region	国名 Country	大学名 University Name	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
大学間協定 University-level Bilateral Agreement				
アジア Asia	中国 China	吉林大学 Jilin University	40	37
	韓国 Republic of Korea	慶星大学校 Kyungsung University	3	11
		釜慶大学校 Pukyong National University	-	1
	台湾 Taiwan	東呉大学 Soochow University	3	1
ヨーロッパ Europe	フランス France	エクス＝マルセイユ大学 Aix-Marseille Université	6	4
		グルノーブル・アルプ大学 Université Grenoble Alpes	2	2
北米 North America	カナダ Canada	モントリオール大学 Université de Montréal	-	1
	アメリカ U.S.A	ベイラー大学 Baylor University	17	14
		カーソン・ニューマン大学 Carson Newman University	-	1
		ミネソタ州立大学マンケート校 Minnesota State University, Mankato	-	1
		ニューメキシコ州立大学 New Mexico State University	-	1
		ハワイ大学ヒロ校 University of Hawaii at Hilo	-	1
学部間協定 Department-level Bilateral Agreement				
法学部 Faculty of Law	韓国 Republic of Korea	東亜大学校 Dong-A University	-	1
国際文化学部 Faculty of Intercultural Studies	中国 China	華東師範大学 East China Normal University	-	2

(参考) 協定終了 Terminated Agreement

国名 Country	大学名 University Name	協定締結期間 Term	派遣 from Seinan	受入れ to Seinan
ヨーロッパ Europe				
チェコ Czech Republic	カレル大学 Charles University in Prague	2013-2020	5	1
フィンランド Finland	タンペレ大学 University of Tampere	2016-2021	0	0
フランス France	KEDGEビジネススクール (旧ボルドー・ビジネス・スクール) KEDGE Business School (Bordeaux Business School )	2000-2016	46	77
	カン大学 Université de Caen	1973-1988	28	14
	パリ第3新ソルボンヌ大学 Université Sorbonne Nouvelle - Paris 3	2004-2019	13	10
イギリス U.K.	リヴァプール・ジョン・モーズ大学 Liverpool John Moores University	2000-2018	22	19
	リージェンツ大学ロンドン Regent's University London	2012-2019	2	4
	マンチェスター大学 University of Manchester	1995-2000	9	6
	ウィンチェスター大学 University of Winchester	2014-2019	3	0
中東 Middle East				
トルコ Turkey	イスタンブール・セヒール大学 Istanbul Sehir University	2018-2020	1	0
北米 North America				
アメリカ U.S.A	ウイリアム・ジュエル大学 William Jewell College	1975-2004	83	52



年度別学生交換(2020-2021年度まで) Student Exchange (until 2020-2021)

	派遣 from Seinan	受入 to Seinan		
		留学生数 the Participants in Inbound Programs		
		交換留学生 Exchange Student	学部留学生数 Undergraduate	夏期日本語研修 Summer Program
1971 - 1972	2	-	2	-
1972 - 1973	6	-	0	-
1973 - 1974	10	10	1	-
1974 - 1975	14	10	0	-
1975 - 1976	16	17	1	-
1976 - 1977	16	15	6	-
1977 - 1978	17	20	3	-
1978 - 1979	18	11	3	-
1979 - 1980	18	17	7	-
1980 - 1981	19	12	2	-
1981 - 1982	18	17	3	-
1982 - 1983	18	9	3	-
1983 - 1984	19	20	13	-
1984 - 1985	22	18	15	-
1985 - 1986	22	22	14	-
1986 - 1987	22	19	14	-
1987 - 1988	20	18	10	-
1988 - 1989	21	16	1	-
1989 - 1990	20	18	2	-
1990 - 1991	20	15	3	-
1991 - 1992	20	17	6	-
1992 - 1993	22	18	9	-
1993 - 1994	20	17	11	-
1994 - 1995	20	16	15	-
1995 - 1996	20	14	15	-
1996 - 1997	24	25	22	-
1997 - 1998	25	23	33	-
1998 - 1999	26	21	33	-
1999 - 2000	28	12	31	-
2000 - 2001	28	19	23	-
2001 - 2002	32	23	20	-
2002 - 2003	34	15	25	-
2003 - 2004	34	21	26	-
2004 - 2005	39	23	26	13
2005 - 2006	37	30	30	13
2006 - 2007	39	43	21	15
2007 - 2008	38	50	19	25
2008 - 2009	35	49	18	37
2009 - 2010	35	50	16	35
2010 - 2011	42	60	14	35
2011 - 2012	49	59	12	29
2012 - 2013	61	70	19	39
2013 - 2014	44	66	19	33
2014 - 2015	60	87	19	37
2015 - 2016	79	89	16	35
2016 - 2017	80	88	13	36
2017 - 2018	88	114	13	38
2018 - 2019	77	127	13	38
2019 - 2020	99	164	15	42
2020 - 2021	2	0	15	0
2021 - 2022			9	

海外研修参加者数 the Participants in Overseas Programs

				2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
中長期 プログラム Mid to Long - Term Program	派遣留学 Study Abroad (Exchange)			49	61	44	60	79	80	88	77	99	(2)
	私費留学 Study Abroad (Self-Financed)	認定留学 Authorized Study Abroad Program		8	2	10	1	1	5	2	2	2	0
		休学留学 Study Abroad with Leave of Absence		44	72	64	60	77	79	53	47	65	0
	合計 Total			101	135	118	121	157	164	143	126	166	(2)
短期プログラム Short Program	語学研修 Intensive Language Program	中国語 Chinese	吉林大学(中国) Jilin University (China)	4	6	0	0	0					
			東海大学(台湾) Tunghai University (Taiwan)						7	6	-	-	
		英語 English	アベリストウィス大学(イギリス) Aberystwyth University (U.K.)	23	30	30	27	38	11	21	17	29	-
			デラウェア大学(アメリカ) Delaware University (U.S.A.)	23	25	15	24	13	23	14	17	16	-
			エンデラン大学(フィリピン) Enderun Colleges (Philippines)								61	39	(11)
			グローバル・ランゲージ・インスティテュート(アメリカ) Global Language Institute (U.S.A.)	10	25	20	22	-	19				
			国立東華大学(台湾) National Dong Hwa University (Taiwan)									10	-
			TAFE クイーンズランド・ゴールドコースト(オーストラリア) TAFE Queensland Gold Coast (Australia)	40	39	57	41	63	50	55	54	55	(7)
			オークランド大学(ニュージーランド) University of Auckland, English Language Academy (New Zealand)	25	25	21	9	17	23	20	10	10	-
			ブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ) University of British Columbia, English Language Institute (Canada)	27	17	14	17	18	12	-	21	-	-
			エジンバラ大学(イギリス) University of Edinburgh (U.K.)	23	22								
			ハワイ大学マノア校(アメリカ) University of Hawai'i at Manoa, Outreach College (U.S.A.)	29	28	47	39	-	12	20	12	29	(5)
			ヴィクトリア大学(カナダ) University of Victoria, English Language Centre (Canada)			30	29	31	30	30	30	26	-
		フランス語 French	グルノーブル・アルプ大学(フランス) Université Grenoble Alpes, CUEF (France)	13	8	8	15	10	8	11	7	-	-
		ドイツ語 German	ボン大学(ドイツ) University of Bonn (Germany)	4	3	0	3	0	4	-	2	-	-
		イタリア語 Italian	シエナ外国人大学(イタリア) University for Foreigners of Siena (Italy)				8	19	15	16	13	10	(9)
			トリノ大学(イタリア) University of Turin	10	6								
		韓国語 Korean	梨花女子大学校(韓国) Ewha Womans University (Korea)	20	14	21	14	10	21	25	27	12	(2)
	合計 Total			251	248	263	248	157	228	219	277	224	(34)
	キャリア アップ 海外研修 Career Oriented Programs	ヨーロッパ国際機関研修(フランス・ベルギー) Visit to International Organizations (France, Belgium)			10	10	8	-	10	10	6	6	-
		ティーチャアシスタント研修(アメリカ) Teacher Assistant (TA) Training Program (U.S.A)			4	5	1	1	2	5	3	-	-
		ツーリズム産業海外研修(シンガポール) Tourism Industry Program(Singapore)				14	18	-	11	20	18	14	-
	その他 Other Programs	ACUCA スチューデント・キャンプ(アジア各国) ACUCA Student Camp (Asia)					2	-	1	-	-	-	-
		アジア太平洋カレッジ(日本・韓国/アメリカ) College of Asia Pacific (Japan, Korea / U.S.A)					15	22	18	15	1		
		日中韓大学共同授業(日本・中国・韓国) East Asian Culture and Communication(EACC) Program (Japan, China, Korea)		10	10								
		学部・ゼミ主導の海外研修 Faculty Led Programs		56	92	91	64	79	132	153	119	133	-
		日本・カナダ学生フォーラム(日本/カナダ) JACAC Student Forum (Japan / Canada)					1	(2)	2	(1)	2	(1)	(3)
		慶星大学校サマースクール(韓国) Kyungsung University Summer School (Korea)									2	-	-
		釜慶大学校サマースクール(韓国) Pukyong National University Summer School (Korea)				3	3	-	2	2	7	1	-
		海外ボランティア Volunteer Abroad Programs		15	15	15	15	16	44	39	48	60	-
	合計 Total			81	131	138	127	118	222	244	206	214	(3)
合計 Total			433	514	519	496	432	614	606	609	604	(39)	

※2020年度はすべてオンラインプログラムの参加者数



